MUSEUM ちば

千葉県博物館協会研究紀要

目　次

【特集】博物館・美術館が地域にできること－協働・共生を目指して－

はじめに

［平成24年度］
●視察報告
視察１　芝山町立芝山古墳・はにわ博物館、
芝山はにわ博物館合同企画展 …… 1
視察２　日野市郷土資料館 …… 2
千葉県博物館協会研究報告会（事例報告）
●報告１　日野市郷土資料館の歩みと課題～市民参加を中心に～
日野市郷土資料館　中山　弘樹 …… 4
●報告２　地域と協働・共生する博物館活動を目指して
～第30回はにわ祭合同企画展
「はにわと共に生きる町」をとおして～
芝山町立芝山古墳・はにわ博物館　奥住　　淳 …… 9
●質疑・討論 ……14

［平成25年度］
●視察報告
視察１　成田羊羹資料館 ……19
視察２　千葉経済大学地域経済博物館 ……20
視察３　和洋女子大学文化資料館 ……21
千葉県博物館協会研究報告会（事例報告）
●報告１　大学と博物館の連携の現状と課題
－東京成徳大学の事例から－
東京成徳大学　青柳　隆志 ……23
●報告２　大学博物館活動と地域連携－和洋女子大学の活動から－
和洋女子大学（文化資料館）　駒見　和夫 ……27
●報告３　企業博物館と地域連携の課題
米屋株式会社（成田羊羹資料館）　宮内　　智 ……32
●質疑・討論
コメンテーター　千葉経済大学　菅根　幸裕
千葉県立現代産業科学館　森田　利仁
パネラー　青柳　隆志・駒見　和夫・宮内　　智
司　　会　千葉県立関宿城博物館　尾﨑　　晃 ……34
千葉県博物館協会加盟館園一覧 ……42

第43号

2014年4月

千葉県博物館協会

はじめに

平成24年度から25年度の２年間、千葉県博物館協会におかれた調査研究委員会では、「博物館・美術館が地域にできること」というメインテーマの下、「協働・共生を目指して」というサブテーマにより活動して参りました。

このメインテーマは平成20年度に設定され、以降、今年度まで継続しております。22年度から23年度のいわば第２期では、「博物館・美術館が子ども達に何ができるのか」をサブテーマとしておりましたが、今期、第３期においては博物館・美術館と地域住民・企業・大学・NPO等の地域を構成する各種の団体が、相互に利益を得て行く活動を模索し、関係を構築して行くことを目指すという視点から、今期のサブテーマを設定いたしました。

平成24年度は、東京都日野市郷土資料館中山弘樹学芸員、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館奥住淳係長のご指導により、地域の市民団体や大学との連携に関する調査を行い、両氏の事例報告を中心に、「平成24年度千葉県博物館協会研究報告会」を開催いたしました。

平成25年度は、千葉経済大学地域経済博物館菅根幸裕教授、東京成徳大学日本伝統文化学科青柳隆志教授、成田羊羹資料館宮内智調査役、和洋女子大学文化資料館駒見和夫教授等にご教示をいただき、大学や企業の博物館の地域に対する活動、また、大学が博物館に何を求めているのかを考え、「平成25年度千葉県博物館協会研究報告会」でご発表いただき討論の場も設けました。

この２年間の活動から、博物館等が地域の自然・歴史・文化をはじめとして今日に至るまでの情報を収集し、市民・県民に発信し、「協働」して地域の活性化を図り、「共生」するという本テーマの重要性と、深化させることの困難性を再認識いたしました。

終わりに、この２年間当委員会の調査にご快諾をいただき、また、本誌にご発表を掲載させていただきました各位・各関係機関をはじめ、ご協力をいただいた多くの方々に感謝申し上げる次第です。

平成26年４月

平成24・25年度調査研究委員会

理事　望月　幹夫（松戸市立博物館）
　　清藤　一順（八千代市立郷土博物館）

委員　奥住　　淳（芝山町立芝山古墳・はにわ博物館）
　　尾﨑　　晃（千葉県立関宿城博物館）
　　菅野　泰久（船橋市郷土資料館）
　　宮下　聡史（八千代市立郷土博物館）（平成24年度）
　　森　　竜哉（八千代市立郷土博物館）（平成25年度）

平成24年度視察報告

視察１　芝山町立芝山古墳・はにわ博物館、芝山はにわ博物館合同企画展

船橋市郷土資料館　菅野　泰久

１　はじめに

平成24年11月30日、平成24年度の活動テーマに基づいて、地域との協働・共生を重視した取り組みをされている芝山町立芝山古墳・はにわ博物館と芝山はにわ博物館を調査研究委員会で訪問し、両館と早稲田大学文学部考古学研究室主催「第30回　はにわ祭記念合同企画展　はにわと共に生きる町―殿塚・姫塚古墳調査の過去・未来―」を見学し、事業内容をお聞きした。

２　芝山町立芝山古墳・はにわ博物館の概要

昭和63年に開館した町立の施設。千葉県内から出土した埴輪や古墳時代の生活や技術を分かりやすく展示。

企画展では、はにわ祭ポスター、昭和31年の殿塚・姫塚古墳発掘の様子、最近行われた早稲田大学に殿塚・姫塚古墳の測量調査成果を紹介。

通常の入館料大人１名200円。

３　芝山はにわ博物館の概要

昭和32年に開館した芝山仁王尊・観音教寺運営の施設。葬列の埴輪として有名な殿塚・姫塚古墳出土埴輪（千葉県指定文化財）をはじめ、周辺地域出土の埴輪を中心にした展示と仏教美術を中心とした展示がある。企画展では、殿塚・姫塚古墳発掘の経緯や埴輪の保存と活用の取り組みを紹介。通常の入館料大人１名600円。

４　地域との協働・共生の取り組み

企画展はその名からも分かるとおり、町の一大行事である「芝山はにわ祭」が第30回を迎えるのを記念しての開催である。昭和31年に早稲田大学を中心に地域住民が多数参加して行われた殿塚・姫塚古墳の発掘調査の様子、最近、早稲田大学によって行われたレーダー探査や測量など最先端技術を使っての調査成果、成田空港建設問題で揺れた町を一つにしようと始まったはにわ祭の歴史、３つテーマで展示が構成されており、主に昭和31年の発掘調査の資料を芝山はにわ博物館で展示し、最近の調査成果とはにわ祭の歴史を芝山町立芝山古墳・はにわ博物館で展示していた。

地域の方々が結束して行った昭和31年の発掘調査と成田空港問題揺れた町を一つにしようとして始まったはにわ祭、この２つに共通していることは、地域の一体感であり、そこに主題が置かれていることが展示からも伺い知ることができた。企画展図録から文章引用させて頂くと「殿塚古墳に降臨する国造とその一族が、現代に生きる人々を諌め、古代の知恵を授けるストーリーで祭は展開する。殿塚・姫塚古墳の発掘によって地域がまとまり、人々の心が一つになった経験とその記憶が芝山町の住民にとっていかに大切だったのかがわかる。これは、地域が一丸となった発掘プロジェクトという歴史的な過程を経て、両古墳に付与され、二次的に創出された文化財の新たな価値である。」とあり、地域がまとまるシンボルとしての殿塚・姫塚古墳に最新の調査成果を付加することで、地域の方々に両古墳の歴史的意義を理解していただくだけでなく、町全体の一体感を醸造していくことを目的とした企画展であることが伺えた。

この報告でお金の話をするのもどうかと思うが、運営母体や入館料が違う二つの館が企画展に限り統一入館料大人200円で両館とも観ることができるという内容であった。入館料など金銭面や人的負担での折り合いをつけることが運営母体の違う団体が合同で何かを進めていく上で最も難しい問題の一つであると思われ、それをクリアし、企画展を開催できたことは両館の方々の並々ならぬ努力と地域への思いがあってこそ実現できたことだと感じられた。

成田空港問題など町が抱える特殊な事情はあるが、近隣の２つの博物館と大学が手を携え、地域住民の多くが関わった古墳の発掘調査についての企画展を合同で行い、地域住民の連帯感を強めるため、地域の活性化のために貢献しようという博物館の取組は、博物館・美術館が地域や大学との協働・共生を目指す上での一つのモデルとなるのではないかと感じられた。

最後になりますが、見学を受け入れていただきました両館に改めて御礼申し上げます。

視察2　日野市郷土資料館

芝山町立芝山古墳・はにわ博物館　奥住　　淳

1　はじめに

千葉県博物館協会調査研究委員会では、平成22・23年度に東京都三多摩公立博物館協会と「博物館が地域にできること～子どもたちのために～」をテーマとする合同研究を進めてきた。

今回の視察もその実績と交流をふまえて、実施されることとなった。

2　日野市郷土資料館の概要

東京都日野市は、東京都のほぼ中央に位置し、多摩川や多摩丘陵の自然に恵まれ、甲州街道の宿場町としての歴史をもち、現在は人口17万８千人を擁する住宅都市として発展してきた。日野市郷土資料館は、平成17年に日野市ふるさと博物館から名称・所在地を変更して、市教育センター、中央公民館高幡台分室と同じ建物（旧小学校校舎）を利用して開館している。資料館では、歴史・民俗・自然の各分野の調査研究・展示を行い、①地域に密着した博物館活動の展開、②市民の自主的な調査研究活動を支援、③市民と連携して市民参加型の博物館活動を強化、④デリバリー博物館や体験学習などを積極的に展開、⑤子どもから大人までの全ての世代に親しまれ、ふるさと日野への認識と愛着深めてもらえる情報の提供を活動の基本方針としている。

展示室は、民俗系では、昔の道具や農具など、自然系では、動物や植物の標本などを中心に展示されている。

企画展は、毎年５回程度実施している。教育普及事業では、古文書講座などの連続講座、エコライフクラブや竹取クラブなどによる体験学習による市民活動、館外での出張講座や出張展示など幅広く行っている。

3　市民とともに取り組んでいる活動

日野市郷土資料館の活動の特色としては、市民が調査・研究・展示と様々な事業に深く関わっていることが挙げられる。主な活動としては、幻の大寺院「真慈悲寺」を探る、日野市50年のあゆみをたどる、勝五郎生まれ変わり物語探求調査、七生丘陵の自然とくらし

探訪、日野市域の古文書調査など多岐にわたる。

調査研究委員会で視察した際には、このうち幻の大寺院調査の会の活動記録をまとめたDVDを視聴させていただいた。それにより、会では関係する資料や遺跡の調査のほか、雨ざらしになっていた石造物を守るため屋根をつけたり、地蔵の笠が落ちたのを上に乗せて修復する作業を会員同士で行うなど、充実した活動をしていた。会員には様々な職種や経歴の方々がいて、そうした知識や技術が事業に活かされていることもあり、意欲的に参加している様子が伺えた。

4　視察を終えて

このように、日野市郷土資料館では市民参加による事業が多彩で、しかも地域の特色にあった内容をテーマにして活発に行われている。資料館は、旧校舎を使用している関係で、団体の活動場所を確保できるという利点もある。

また、こうした市民活動を支えるために、担当している学芸員が参加者の意向をくみながら運営に関わっているとのことであった。そして、市民活動もボランティアとして労働力の提供だけでなく、調査研究でも資料館と市民との協働が成り立っている例もある。市民活動は、会員により会への関わり方や求めるものが多様であるなかで、コーディネートする学芸員の役割が重要になってくることを改めて認識することができた。

平成24年度千葉県博物館協会研究報告会

名　　称　平成24年度千葉県博物館協会研究報告会

テ　ー　マ　「博物館・美術館が地域にできること－協働・共生を目指して－」

主　　催　千葉県博物館協会調査研究委員会

日　　時　平成25年３月15日（金）　午後１時30分～午後４時30分

会　　場　千葉県立現代産業科学館　研修室

内容・日程

開 会 挨 拶　千葉県博物館協会会長　上野　純司（千葉県立中央博物館館長）
千葉県立現代産業科学館長　石井　　暁

報　告　1　日野市郷土資料館の歩みと課題　～市民参加を中心に～
中山　弘樹（日野市郷土資料館学芸員）

報　告　2　地域と協働・共生する博物館活動を目指して
～第30回はにわ祭合同企画展「はにわと共に生きる町」をとおして～
奥住　　淳（芝山町立芝山古墳・はにわ博物館学芸員）

質疑・討論　パネラー：中山　弘樹・奥住　　淳
司　　会：尾﨑　　晃（千葉県立現代産業科学館主任上席研究員）

報告１　日野市郷土資料館の歩みと課題～市民参加を中心に～

日野市郷土資料館学芸員　中山　弘樹

はじめに

初めまして、日野市郷土資料館の中山と申します。元々埋蔵文化財担当として本庁に約10年おりまして、そのあと資料館に異動して７年になります。本日は、日野市郷土資料館で開館以来取り組んで参りました、市民参加・連携事業について、どうしてこういった活動を始めたのか、また今日に至る経緯などを中心に一学芸員としての私見もまじえながら、ご報告いたします。

日野市ですが、東京のヘソのような位置にございまして、犬の顔のような形をしております。面積が27.53㎢、台地と丘陵の間に沖積低地が広がり、多摩川と浅川が流れるといった土地です。考古学の側面からは、落川・一の宮遺跡や南広間地遺跡などが有名です。現在、人口は約179,000人弱ですが、開発の進展もあり、まだまだ増加の傾向です。

では、レジュメによる説明に加え、具体的な事例は写真･DVDを用いて進めていきたいと思います。

１　郷土資料館の概要

当資料館は市の直営施設で、博物館法上は、博物館類似施設です。もともと郷土資料館の前身は、日野市ふるさと博物館でございます。日野市神明４丁目に占有施設を持ち活動していました。2005年４月に日野市郷土資料館と改称の上、日野市程久保にある旧小学校建物に移転しました。日野市ふるさと博物館が入っていた建物は日野市立新選組のふるさと歴史館となり、市長部局による観光施設として運営されています。

郷土資料館としてスタートする際には、博物館活動の後退を懸念する関係者による大きな議論がありまして、さらには市民の間でも、様々な問題提起や意見表明のあったことはご存じの方々もいらっしゃると思います。

さて、郷土資料館の移転先の旧小学校校舎は、教育センター、公民館高幡台分室も設置された複合施設です。郷土資料館として、展示収蔵スペースを３教室分、体験スペースとして元の給食調理室１室、事務スペース１教室、資料書庫が２教室となっています。展示収蔵スペースについては、３部屋すべての外壁窓部分に遮光フィルム・遮光カーテンを取り付けてはいますが、黒板等を撤去し、エアコンも設置したのは１部屋のみにとどまります。

書庫等はまったく改修していません。

郷土資料館に移転した当時、私は本庁で埋蔵文化財に関わっておりましたので、やや冷静に振り返ることができますが、当時直接かかわっていた職員や市民の方々には、非常に無念の感があったと思います。

なお、元の博物館には温湿度管理された収蔵庫が３室ありまして、そこには郷土資料館がふるさと博物館時代から収蔵している資料、都指定文化財も含みますが、そうした資料は、市長部局との当初の取り決めで共同利用しています。また、郷土資料館の特別展は年１回、秋季に行いますが、会場には新選組のふるさと歴史館の展示室の一部を使用しており、これについても当初の取り決めとなっています。

当資料館の職員構成は、事務職３名・専門職５名です。事務職は館長、係長、再任用職員（週４日勤務・元館長）で、専門職は正規学芸員２名（内１名育児休暇中で臨時職員による代替）、非常勤学芸員２名（週４日勤務）、市史編纂に関わった非常勤職員１名（週４日勤務）となっています。再出発後、今日に至るまでに、非常勤学芸員、事務職の再任用職員が各々１名増員されています。

２　量的な指標

予算規模は、2006年、新スタートの２年目ですが、人件費を除くと6,625,000円弱でした。2011年（平成23年度）の決算を見ると、市財政が厳しい状態の中で12,000,000円と倍に近い状況まで持ち直してきました。

年度別利用者数ですが、平成14年～16年までがふるさと博物館時代の入館者数になります。平成17年以降は入館者のみではなく、利用者ということで様々な事業に関

わった全ての人数をカウントして集計しております。14年～16年については、入館者のみで講座受講者は含んでおりませんが、それを加えても２割増えるということはないと思います。平成14年の16,000人位が、特別展を含めて、ふるさと博物館時代の通常時のマックスとなります。平成15年には３万人弱、16年には５万人弱の入館者がありましたが、これはかなりイレギュラーなケースで、新選組の特別展を開催したことによります。

平成17年以降、不利な立地条件や貧弱な施設という劣悪な状況の中、とにかく利用者を増やすために、「１担当者１事業」というモットーで、利用者数をほぼ唯一の活動成果の指標として頑張ってきた時期がありました。

たしかに、金沢市の二十一世紀美術館館長を務めた箕輪さんの話などを聞くと、とにかく集客の重要さをおっしゃっています。もちろん、利用者の増加は良いことですが、学芸員の立場としては、博物館という「場」で、どのような経験をしたのか、その質と利用者数の積分で評価したいのですが…。

とはいえ、この点は指標化が困難なため、本日は入館者数をグラフ化するのみにとどめます。

課題としては、平成20、21年あたりをピークに利用者数が少し減少に転じたことが挙げられます。私を含め、育児休暇の取得などで、正規の学芸員の１名が欠けるといった状況か常態化し、マンパワー的にかなり厳しいことも一因です。

次に類型別の利用者数（平成23年度）です。展示室は、受付職員がいないので、入館者自らの申告に基づく数字です。実際にはもっと多いはずです。秋季の特別展の観覧者あるいは講演会等の関連行事参加者が4,000名弱、併せて6,000名なので、利用者総数の約半分程度が展示利用者となります。一方、本日の本題である市民が様々な形で関わっている各種活動への参加者は、4,614名でした。次に、小中学校への出張授業、団体見学、各種イベント・体験学習講座を利用した方の合計が2,211人。

3　郷土資料館としてのミッション

郷土資料館として再出発するにあたり、どういう形で事業を進めていこうかと整理した際に、条例等で明示したわけではありませんが、大きくは①地域密着型・住民参加型でいこう、さらに②行動する博物館をめざそうということが職員の間で共有されています。地域の歴史・民俗・自然についてテーマを設定し、その調査活動や成果の展示・普及活動を、住民の皆さんと進めていく。ただ施設の中で待っているのではなく、目にみえる活動を地域の中で展開していこうというミッションです。

アクセスに難のある立地や貧弱な展示資料・施設で、従来通りの活動を展開していたのでは、先行きの不安があります。一方で、博物館に大きな期待をかけてくださる市民もいらっしゃる。自分の暮らす地元のことをもっと「知りたい・学びたい」という人々の意欲に、どう応えていくのか。こうしたことを踏まえて、前述のミッションをたてて再出発しました。

イメージ図で説明しますと、これがふるさと博物館時代ですが、博物館がコアにあるとして、観覧者は年に１回来館されるかどうかですが、リピーターであったり、地域の資料学習に参加するという方はそれほど多くない。やや語弊がありますが、「親衛隊」がいないという状況です。リピーターや調査参加者、博物館が自分達の生活にとって欠かせない存在であるという人々をどれだけ増やしていくのか、そこに生き残りをかけるという戦略でいきました。それにあわせて観覧者が増えていけばいいという狙いもありました。

4　市民参加・協働の事業展開

資料館になって、新たに組織した市民活動グループですが、職員一人一人が１事業を担うという目標で動き始め、年に数事業ずつ増やしていくという形で増えていきました。そのグループの詳細については、お手元の資料になります。資料館になる前から、連携していたグループもありますが、加えて配布資料にあるグループを立ち上げたということになります。

体験系あるいは技術伝承系としては、平成17年に「エコライフクラブ」、「竹取クラブ」（メカイ作りの技術継承）。翌年には民具を自分たちで修理して活用できるようにしたい、という方々が相談にみえましたので、「程久保ボランティア」としてやっていただいています。

調査研究系については、資料館スタッフと一緒に調査研究して、その成果を特別展として展示していこうというのが大前提です。テーマ設定は資料館が行ない、参加を呼び掛けて、応募した方々をグループ化しています。調査研究、展示に留まらず、文化遺産や自然遺産等を広く地域の方に訴えて、守り伝えていく、あるいは活用まで広げていこうという視野のもとに、活動の地平は広がってきています。平成18年「幻の真慈悲寺調査の会」、「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」が産まれ、翌年「七生丘陵調査団」、平成23年に「日野市のあゆみ50年を調査す

る会」設立という具合です。詳細は、本日の冊子をご覧下さい。

なお、ここではボランティアという言葉を使っていますが、「ただ働き」ということではなく、「学び」という契機を媒介とした協働者として捉えています。博物館も何か得ることがあり、参加された方も得るものがあれば良いというwin－winの関係を作りたいと思ってやっています。

5　市民参加・協働事業の実際

では、具体的にどういったことをやってきたかと言いますと、担当職員を決めて、参加を呼びかけます。市の広報であったり、独自のチラシをつくって、社会教育施設で置いてもらったり、職員が千枚単位のチラシを、ポスティングするといったことを初期のころはやっておりました。グループの運営は、自主性を尊重し、資料館の職員はリーダーでも指導者でもありません。たとえば資料館として、来年度こういう形で展示をしたいというたたき台を示して、「皆さんどうでしょう」ということで、色々な意見をいただきますが、なかなかまとまらず大変な思いをします。その中でお互いの信頼関係を徐々に作り上げ、最近は軌道に乗っている状況です。

いくつかグループを作り上げたというお話をさせていただきましたが、興味のある方は、いくつものグループに参加し、熱心に活動されています。そういうこともあり、活動日が重ならないように、工夫して設定しています。当初、勤労者も参加できるように土曜日、日曜日に設定していましたが、30代、40代の働き盛りの方が参加することは必ずしも多くないという現実もあり、一部のグループは、平日を主体にしている場合もございます。

必要な経費については、委託費という形でお支払いしています。委託費を払うために必要だったということで、グループ化している面もあります。ですが、自分はそういう組織は嫌いなのでという方もいらっしゃって、その場合は緩い形で運営しています。

それぞれのグループの中には様々な方がいらっしゃいます。個人としてコツコツと研究を深め、その成果をみんなに聞いてもらいたい、その上で情報交換したいという研究志向の方もいれば、自分達の成果を展示・パネルにわかりやすくまとめて市民の方に広く見ていただきたいという方、最新の研究成果に触れることが楽しいというのもあれば、仲間での見学やフィールドワークの成果を見るのが楽しいという方もいいらっしゃいます。グループに入ってくる方も、入門レベルの方で少し興味があり参加したという方もいれば、研究者レベルの方もいらっしゃって、幅が非常にあり、どのように活動を展開すれば最大多数の最大満足が得られるのか、なかなか大変です。関わった職員や学芸員が一番苦労するのがこの点です。

「エコライフクラブ」を除き、一度登録すると、再登録は必要ないということで、年限等は設けずに終身活動で行っています。７、８年立ちまして、お亡くなりになった方が二人いらっしゃいます。お二人共、熱心に活動されていて、自分が関わった活動成果を印刷した冊子類を棺に入れて欲しいというほどでした。

次に、展示について触れます。毎年開催する特別展や企画展では、テーマに応じて、それぞれに関わるグループが、ジオラマをつくってみよう、映像をつくってみようだとか、あるいは１コーナーを担当しようだとか、グラフィックパネルを作ってみるといったようにいろんなことをやっています。特別展会場では、展示に関わったグループの皆さんに、「生の声で解説ガイドをして下さい」とお願いし、可能な範囲で協力していただいています。話し方の上手下手ではない、全てがわからなくてもいい、ただ、なにか自分が関わって得たことや自分の思いを、来館者の方に伝えてもらいたいということでお願いしています。ガイド活動を通し、来館者とのコミュニケーションによって、新しい情報が得られるということもあります。

特別展や企画展とは別に、出張展示にも取り組んでいます。京王線高幡不動駅のコンコースでは年に１回、パネル展を開催しています。この場所の利用については、自分達の成果を展示し、より多くの方々に知って頂きたいと、「七生丘陵調査団」のメンバーが開拓されました。管理会社と交渉して１ヶ月間（平成25年以降３週間）無料で借りています。

「七生丘陵調査団」では、今年度はこんな展示を行うとして決定したら、独自に取材しデータを集約し、Ｂ１やＢ２のパネル原稿を作成しています。中にデザインを仕事としていた方がいて、レイアウトも見事です。平成24年度もパネル原稿30枚全て自作し、館としては印刷製本費を60,000円程度支出するのみでした。この際の、パネル展のパネルを縮小プリントしたものです。どうぞご覧下さい。

そういった活動以外に、館外においても、研究成果を公表したいとして、研究雑誌等に投稿したり、自費出版に近い形で成果を公表する方もいらっしゃる。

6　日野市郷土資料館の当面する課題

個別のグループの活動についての詳細な事例報告に

入る前に、私たちがどういった課題に直面しているかまとめておきます。

今現在、かなりのグループをかかえており、率直に言って今の職員体勢では、そのグループの活動に関わるだけで手一杯な状況で、何か新しい事業を展開していくには、何かを整理しないと事業が回らないところです。

次に、博物館の業務のバランスをどう見るかということですが、我々の活動は博物館学的にいうと、「第三世代の博物館」というのでしょうか、たんに貴重な資料を展示するだけではなく、市民と共に事業を展開し、ひとを、まちを育てていくのが主要な取り組みになる。それが表看板になりますが、収蔵資料の管理や新規受け入れ・整理等々といった裏方仕事ではあるが、博物館の根幹をなす仕事はどうするのか?業務バランスをどうとっていくのかということです。当館では常設展をやらずに、企画展で回しておりますが、学芸員自身がその企画展の準備のために調査研究に割ける時間もろくにない状況に追い込まれています。そのあたりをもう一度見直す必要があります。

今、「学芸員もコーディネーターになったり、プロデューサーになったりしなければならない」と盛んにいわれていますが、一方で我々がそうしたことに専念してしまうと、誰が資料の保存・管理の責任を取るのでしょうか?そのあたりで、我々学芸員としてはコツコツと資料に向き合って整理を進め、資料データ目録の充実を進めていきたいが、時間をとれない状況です。

市当局や外部から見ると、市民が活き活きと活動しているという表看板は評価を得やすいのですが、裏方作業の予算や時間確保が学芸員に課された課題といえます。もちろん、そうした作業も一定の資格や経験を考慮して市民と共に進めることは不可能ではないとは思います。現に、近世以降の文書類の整理や翻刻は市民と共に進めています。とはいえ、そうした作業をほかの資料領域に拡大するための方針や戦略策定自体も一仕事で、片手間では困難な業務です。

それから、ICTの進展に伴い、デジタルデータの提供を今後どのように展開していくのかということもあります。これについても、機械的にデジタル化できるものは、どんどんデジタル化し、画像としてはかなりの蓄積がありますが、属性情報を新たに付与していくことが中々進んでいかない。市民から「風景写真を中心に、いつでも見られるようにしてほしい」という強い要望がありますが、対応しきれていません。

広報宣伝体勢の充実も課題です。諸グループのメンバー、ふらっと展示を見にくる方、イベントに参加された方等と話をしてみると、「すばらしい事業なのでもっと宣伝しなさい」とお叱りをいただきます。市の広報や独自チラシの配布、ホームページでの情報発信、マスコミ等への情報提供も行なってはいますが、必ずしもシステマティックには取り組めていません。

館設立から８年が経過しますが、これまでの歩みを総括して、今後の歩みをとは思っていますが、今、日野市の行革大綱の中で、来年度（平成25年度）、市立新選組のふるさと歴史館との統合を実施する計画がでておりまして、我々には具体的な話はまだありませんが、なにか動きがある可能性もあり、市民の理解が得られるか懸念されるところです。（補記　平成25年度中の統合は見送られた。）

７　「事業評価」という壁

近頃は何でもかんでも数値での評価を求められ、困ったものです。市民参加・協働を進め、地域博物館が「第三世代」の博物館に生まれかわると、市民や当局が評価してくれるのかというと必ずしもそうではありません。

当館についていえば自己評価、協議会委員による評価市の公募した市民委員による評価、市本部評価と何段階もあります。

悲しいことに市民評価と市本部評価で、「エコライフクラブ」は「廃止」との評価を受けてしまいました。我々としては、単に機械化が進む前の農業を追体験するだけでなく、農をとおした営みのなかの生活技術や暮らしの知恵といったものを体験したり、伝承していくという視点で捉えていましたが、この意図が伝わらなくて、単に米を作っているだけだとか、農業体験しているだけだとかのネガティブな評価になり、もうやめなさいという評価になってしまいました。

これに参加している市民の方は立腹され、教育長に直談判に及んだということです。郷土資料館の事業としては廃止になりましたが、「エコライフクラブ」の運営にあたっていた有志の方は現在サークルとして存続しています。一昔前の農具を使って農に取り組むのみでなく、味噌作り、豆腐作り、藁草履や正月飾り、どんど焼きなどに取り組んでいます。

「幻の真慈悲寺調査」については、観光との結びつき、里山ミュージアム等地域おこしに貢献するとアピールし、なんとか事業継続の評価を頂きました。

こうした一般市民や市当局による評価にどう対応していくか、マニュアルのようなものはありませんが、乗り越えて

いく必要のある「壁」だと思います。

（補記「勝五郎生まれ変わり物語探究調査事業」は、平成25年度の市民評価により「休止・廃止」判定を受けたが、市の本部評価でその２つ上のランク「有効性・効率性を改善」と位置付けられ、なんとか継続できることになった。）

8　事例紹介①～勝五郎生まれ変わり物語

これは「勝五郎生まれ変わり物語探究調査団」のメンバーが自分達で鳥取までの旅費を払って、調査に出かけているところです。各地の研究者とも、資料館という媒体があるので、自分達だけでは接点が作れなくても、接点が出来たり、見ることが困難な資料も閲覧させてもらえたりといったことがあります。これは特別展で展示するためのジオラマを自分達で作っているところです。これは特別展オープニングのセレモニーで関係者が挨拶をされているところ。この展示は、新聞でも取り上げられました。

実際に現地見学を行う場合には、市民の調査団の方がガイド役となります。高幡不動という大きなお寺がありますが、そこで講演会を開催すると，今までにない規模で、市民の方が来聴に見えます。このお菓子ですが、資料館が作るのではなく、近所の和菓子屋さんが便乗して売っているものです。着実にまちの中に、さらにはこのお話の関係する八王子市での出張展示や講演会などへと広がりを持ってきました。

9　事例紹介②～真慈悲寺の調査

これは真慈悲寺という中世のお寺を調査するプロジェクトです。「吾妻鏡」に真慈悲寺がでてきます。百草八幡神社の所蔵する重要文化財「阿弥陀如来坐像」の背中に真慈悲寺と刻銘があって、お寺があるのはわかるのですが、どこに所在したかが不明です。これについては郷土資料館だけではなくて、まちおこしという視点もあり、全庁的に取り組んでいこうとして、関係する自治会や資料所蔵者、土地所有者等々とプロジェクトを作って進めています。豊かな緑の中に、歴史遺産が多数残っていることから、他に代えがたいそれらの価値を確かめ、後世に伝えていく仕組みとして、里山ミュージアム構想も進めています。このプロジェクトの実働部隊として活躍しているのが「幻の真慈悲寺調査の会」とその周辺で活動している市民の方々です。

ここに写っているのは、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、都立大名誉教授の峰岸純夫先生です。中世史の専門家ですが、ご自身も「一メンバー」としてこのグループで活躍し、発掘現場でも熱心に掘っています。この調査に関わる市民を募集するときはこういった要項をつくりました。見学会を行ったり、イベントも現地で行い、発掘調査も毎年実施しています。

これからは、映像でご覧下さい。これは、調査対象地域の近世のお墓を自分達で文化遺産として守ろうと言うことで、清掃をおこなっています。これは、墓石が壊れていて、それを調査団の自費で修復した際のものです。この設計をした方は、今お回ししている分厚い本を書かれた方で生化学の専門家です。なお、これだけだと雨が降ったら、また傷んでしまうかもしれないので覆い屋をかけようということになりました。グループの中に１級建築士の方がおりまして、その方の設計で建てています。これは研究発表会の様子です。これは拓本をとっているところです。

こうしたメンバーの中には、在職中は世間的に相当尊敬を集めるような肩書きを持っていた方々も多数いらっしゃいます。しかし、みなさん、第二の人生はそうした過去は脱ぎ捨てて、実にフランクかつフラットに、新たな友情を培いながら、調査やその成果の発表、現地でのガイド活動等をそれぞれの形で楽しみつつ展開し、自己の人生を充実したものにされています。

時間も限られますので、雑駁ですが、以上で事例報告とします。

※　昨年度お招きいただいて行なった報告のテープ起こしをしていただいた原稿に、多少手を加えました。そのため、報告のとおりの内容ではありませんが、ご海容ください。当日示した表やグラフ、また事例紹介については、紙面の関係で詳細に記すことはできませんでした。報告以後の動きについては、「補記」と明記して、2014年２月26日現在の事実をまとめました。

なお、報告者は、2014年４月１日より、日野市教育委員会生涯学習課文化財係に勤務しています。

報告２　地域と協働・共生する博物館活動を目指して
～第30回はにわ祭合同企画展「はにわと共に生きる町」をとおして～

芝山町立芝山古墳・はにわ博物館学芸員　奥住　　淳

芝山町立芝山古墳・はにわ博物館の奥住と申します。博物館の学芸員と教育委員会の文化財の業務を兼務しております。この千葉県博物館協会の調査研究委員会の委員もやっておりまして、ちょうど平成24年の秋に第30回はにわ祭を記念した合同企画展を開催しましたので、その概要をお話させていただければと思います。タイトルは「はにわと共に生きる町」といいます。ご存知の方もあると思いますが、芝山町は「はにわ」をテーマにして町おこしを行っています。それで30回を迎えるはにわ祭を記念して、この機会に祭を検証して文化財を生かしたまちづくりにどうつなげていくか、その再出発のきっかけにしたいということで企画しました。

それでは、まず芝山町の紹介からしていきたいと思います。芝山町は千葉県の北東部に位置しています。もっとわかりやすく言いますと、成田国際空港の南に隣接していて、空港を囲むように位置しております。町は昭和30年７月に二川村と千代田村が合併し町制施行して誕生しました。町名は、明治元年に置かれた柴山藩と芝山仁王尊で知られる観音教寺という有名なお寺がありまして、それらにちなんで名付けられました。人口は約8000人です。合併したころは12,000人くらいでしたが、成田空港問題などにより、人口は減少しております。

それでは、次に芝山町が古墳とはにわの町として町おこしをするようになった経緯をご紹介します。昭和31年になりますが、芝山町と隣の横芝光町、当時は横芝町になりますが、その境に殿塚・姫塚という古墳がありまして、地籍は横芝光町になります。ただ、殿塚古墳の地権者が芝山町の住民でありましたので、観音教寺の濱名徳永住職の発案で、早稲田大学の考古学研究室が発掘調査を行ったところ、はにわが列をなして出土して、葬列のはにわと呼ばれるような発見がありました。この発掘は、観音教寺が主導して早稲田大学が行ったのですが、芝山町や横芝町の地元の方々が協力して、地域ぐるみの発掘のような形で現場が支えられていました。出土したはにわも大型で造形美にも優れていましたので、昭和33年に古墳は国指定史跡に

なっています。殿塚古墳は、全長88mの前方後円墳で二重周溝をもっていて、６世紀半ばの築造とされています。姫塚古墳は、全長58.5mの前方後円墳でやはり二重周溝がありまして、６世紀後半の築造とされています。殿塚・姫塚という名称は、後世の人々が仲良く並んでいる塚の大きい方を殿、小さい方は姫と言うように見立てたことによると思われます。造形美あるはにわが列をなして出土したのは、姫塚になりまして、はにわが立てられていた原位置で発見されたことで有名になりました。武人のはにわには、高さ160センチを超えるものもあり、大きさでも日本で有数と言えます。他には、馬子のはにわ、巫女のはにわ、農夫のはにわなどが出土しています。

次に、芝山仁王尊を紹介いたします。正式には天応山観音教寺福聚院と言います。奈良時代の781年に藤原継縄により創建されたと伝えられる天台宗の古刹になります。中世には千葉氏の祈願寺、近世には火事・泥棒除けの祈願寺として庶民の信仰を集めました。成田山とともに各地から参拝され、昭和30年代までは門前に旅籠もありました。千葉県指定有形文化財の三重塔もございます。本堂の横には、観音教寺で運営されている芝山はにわ博物館がありまして、殿塚・姫塚から出土したはにわは、こちらに展示されています。今回の合同企画展は、観音教寺のはにわ博物館、私どもの町立の博物館、それから発掘を行った早稲田大学の考古学研究室との共催という形で行わせていただきました。

このように、芝山町がはにわの町として有名になったのは、観音教寺の発案による発掘が出発点になって

芝山はにわ博物館展示風景

います。もう一つ、芝山にとって特殊な事案がありまして、それが成田空港問題になります。これが、はにわを活かしたまちづくりとリンクしていきます。羽田空港の容量が限界に近づくなか、政府は昭和41年に突然、成田市三里塚に新国際空港を建設することを決定しました。これに対して、地元では激しい反対運動が起こり、芝山町も長く混乱が続くことになりましたが、昭和53年５月20日に新東京国際空港として開港となりました。こうした事態に対して芝山町では、鉄道延伸や騒音対策など十一項目の要望を国と空港公団に提出しました。開港後は、空港問題の解決に向けて、国と空港公団と反対派の間でシンポジウムや円卓会議が開催されるようになり、地域社会と空港の「共生」を目指すようになったという経緯がございます。現在では、より踏み込んで「共栄」という理念で空港と町の関係を模索しているところです。

成田空港の場所ですが、下総台地の真ん中でちょうど分水嶺のところにあります。宮内庁の御料牧場もありました。一方で明治時代、あるいは戦後にかけて、開拓によって農地となったところです。移住してきて苦労して開拓をしてきた方々にとっては、その土地を急に奪われることになったことが、反対運動につながっていきました。反対運動は、ちょうど学生運動の時代と重なったこともあり、死傷者も出る深刻な事態となってしまいました。また、芝山町は、騒音の影響も多く、町の７割の地域で騒音下にある状況です。

そして、はにわ祭についてですが、こうして空港問題で割れていた町をもう一度一つにしようと町民の発案で始まった祭になります。空港建設をめぐって町内が賛成と反対で最も対立していた頃に町議会議員を務めていた伊藤髙夫さんという方がいらっしゃって、空港問題で暗いイメージの町を払拭して町民が心を一つにできるものを探しました。そこで、自分が文化財に関心をもっていたこともあって、殿塚・姫塚古墳出土のはにわに注目して、古墳時代の生活を再現すれば観光客を呼ぶこともできるし、町民には、かつて時代の最先端を行く文化を誇っていたことを知ってもらい、自信と誇りを持たせられると考えたのです。

伊藤さんは、服飾研究家の小堀栄寿さんの協力をいただいて、自費で古代人の衣装の復元を試みました。文献や資料をたよりに推定して作業を進め、当地を治めていた豪族とその奥方の衣装を再現しました。衣服の材質は麻を用いて、冠、勾玉、耳飾り、腕輪、刀剣などの装飾品も揃えました。現在では私どもの博物館で展示させていただいております。

その後、昭和56年に、濱名住職など７名の町民有志が集まって、農業文化博覧会企画推進委員会というのを開きました。この委員会では、町の活性化には博覧会の誘致が必要と考え、そのために古代衣装の行列を中心に「はにわ祭」を行い、芝山の古代文化を全国にPRしてはどうかということを考えました。そして、翌年の１月に衣装の復元を開始し、５月に「はにわ祭」のネーミングを決定し、９月には町議会の後援と補助金が決定し、商工会など各種団体の協力も得られることになりました。祭の監修は、殿塚・姫塚古墳を発掘した滝口宏早稲田大学教授にお願いして、出土した埴輪に基づいた儀式の考証などのアドバイスを受けました。こうして、昭和57年10月31日、国造夫妻と43名分の古代衣装を揃えて第１回のはにわ祭が開催されました。祭では、いくつかの場所を舞台にして、儀式を行っていきますが、その儀式をとおして厳しい大自然の中、物質的には貧しかったけれども心豊かに力を合せて生き抜いた古代人を見直し、人のつながりを取り戻し町の活性化と融和を目指すストーリーになっています。

儀式は、殿塚・姫塚に古代人が降臨してくる「降臨の儀」から始まります。これは、古事記の記す天の岩戸開きになぞらえて、古墳の石室の開扉を祈り、当地方開拓の祖である武射国造の一族が殿塚・姫塚に出現し、国造から御託宣を受けるというものになります。殿部田のお囃子の伴奏で巫女の舞が披露されます。次は、「交歓の儀」で、観音教寺境内に古代人の来臨を仰ぎます。僧侶による歓迎法要があります。続いて、メイン会場の芝山公園に移ります。ここでは、まず

合同企画展示風景

「行列の儀」が行われて、古代人が勢揃いして会場を練り歩きます。古代人には地元の小中学生が扮しています。町内子ども会による手作りの子どもはにわみこしも登場します。続く「歓迎の儀」では、古代人歓迎のため現代人によるアトラクションが催されて、巫女の舞と白桝粉屋踊りが披露されます。最後の儀式が「昇天の儀」で、現代人の見守る中、古代人はメッセージを残し、明年の再開を約束してかがり火の中、静かに昇天していきます。

そして、このはにわ祭は平成24年にちょうど30回目を迎えましたが、平成23年には、殿塚・姫塚を調査した早稲田大学の考古学研究室に新しく着任された城倉正祥先生から、芝山町周辺の古墳をフィールドとして再調査をしていきたいとの申し出がありまして、芝山町高田２号墳の測量調査や学術調査を行っていました。また、平成24年には、殿塚･姫塚古墳の測量調査･レーダー探査を実施しましたので、その成果をはにわ祭30周年に合わせて発表して、さらに過去の調査成果を今一度振り返って再検証しようということになりまして、町立芝山古墳・はにわ博物館、発掘を主導しはにわを所有する仁王尊の芝山はにわ博物館、早稲田大学で協働し合同企画展として実施することになりました。その際に、殿塚・姫塚の正式な発掘調査が未刊行ということもありますので、併せて出土遺物や図面、当時の発掘関係資料を再整理していくことにいたしました。

そして、今回の企画展がどこまで協働できていたかといいますと、難しい面もあったのですが、行政、民間、大学の三者による企画展ということで進めてまいりました。それぞれの館と大学を紹介しますと、私の勤務する芝山町立芝山古墳・はにわ博物館は、昭和63年に開館して、房総の古墳とはにわをテーマとして、主に千葉県内から出土したはにわや古墳時代の生活や技術を紹介する展示をしております。また、私は教育委員会の文化財担当として殿塚・姫塚古墳を管理や活用を考えていくという立場もありますので、そういった面でも何かできないかなと考えていたところです。次に芝山はにわ博物館は、観音教寺の博物館ですが、昭和32年に開館されまして、殿塚・姫塚古墳出土埴輪を保存、管理していくという立場になります。早稲田大学は、調査主体者という立場になります。このように、それぞれの立場、課題があるのですが、それを協働によって一つ前に進めるというきかっけになればいいなという思いで進めていった企画展になります。

それで、企画展では、殿塚・姫塚古墳を再発見するために、あるいは文化財としての価値をどうやって高めていくかということで、４つの視点を定めました。１つ目は、殿塚・姫塚は地元住民の協力で行われた発掘調査で、調査を担当された早稲田大学の滝口宏先生のご意向もあって、遺物も現地で保存されることになったこと、２つ目に、空港問題で割れた町を一つにするために、はにわという文化財が活用されたこと、地域のシンボルとしてのはにわに光を当てること、３つ目は、はにわ祭の意義を再確認して、どのように地域の活性化につなげていくか、４つ目がはにわ祭を地域住民を巻き込んだ形で、いかに次世代へつないでいくかということを考えました。

続いて、企画展の概要を紹介いたします。タイトルは、「はにわと共に生きる町―殿塚・姫塚古墳調査の過去・未来―」になります。会期は、平成24年11月３日（土）～平成24年12月２日（日）、会場は芝山町立芝山古墳・はにわ博物館と観音教寺の芝山はにわ博物館になります。この両博物館は、歩いて５分くらいのところにあります。展示の手法が違いますので、それぞれはにわについて違った見方ができますが、一方で、一度に見られないという面もございます。主催は、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館、芝山はにわ博物館、早稲田大学文学部考古学研究室の合同です。

展示の内容ですが、第Ⅰ章は、「古代の神々が町を救う―はにわ祭り30年―」ということで、成田空港問題とはにわ祭のはじまりを紹介していまして、私が担当いたしました。はにわ祭の第１回から第30回までの全ポスターも展示することができました。はにわ祭では、写真コンクールをやっていまして、最近では、その優秀作品がポスターのメインに使われています。第２章

はにわ祭ポスター展示風景

は、「地域を総動員せよ！―殿塚・姫塚古墳の調査の開始―」というテーマで、昭和31年の発掘調査の経緯や当時の様子を紹介しています。この章以降は、早稲田大学で展示を担当いたしました。発掘の経緯につきましては、当時27歳であった観音教寺の濱名住職が、近くに大きな古墳があるので、これを調査してみようと考えられて、ご出身の大正大学の古江亮仁先生に相談されまして、早稲田大学の滝口先生をご紹介いただいたとのことです。その時の古江先生が濱名住職を紹介するために持たせた名刺も展示しています。他には、発掘調査の状況を回顧する内容ですので、発掘に関わる資料や写真が主な展示資料になります。発掘調査当時の写真は、大学と観音教寺の両方に残されていましたが、今回これらを再整理することができまして、新しく見つかった写真もございました。はにわの出土状況がわかる写真も多いですが、石室の調査を住民が取り囲んで見学している様子や見学者の自転車を整理する青年団の様子、芝山町の中学生が学生服を着て調査に参加しているのがわかる貴重なものもあります。当時参加された方々は、最近再び早稲田大学が調査に来ているので、懐かしがっている方もございました。展示資料では、当時の学生が作成した図面や発掘日誌、大学が発掘希望者を募って、それに応募した学生の葉書、それから町に残っていた資料で、発掘のお手伝いの動員が町の各地区に割り当てられたのですが、調査後に大学から地区に贈られた感謝状などもあります。それから、当時発掘に参加した学生や地域住民の方々の聞き取りも行いました。また、当時の新聞記事やパンフレットからは、この発掘がかなり話題になっていたことがわかります。

続いて第Ⅲ章は、「殿塚・姫塚古墳を最先端の技術で調査する」ということで、平成24年に早稲田大学が行いました最新の測量調査とレーダー探査の成果を紹介しました。殿塚・姫塚古墳は、墳丘しか国指定になっていなくて、二重周溝が範囲外なのですが、レーダー探査で、二重周溝の範囲を確認することが出来ました。それから、石室は埋まってしまっていますが、その位置も確かめられました。その成果の図面や調査に用いた機器類も紹介いたしました。

最後は、第４章「殿塚と同じ形の古墳の調査―芝山町高田２号墳―」になります。高田２号墳は、全長52メートルの前方後円墳で、こちらは、測量調査とレーダー探査を行って、その成果をもとに発掘調査を実施しました。殿塚古墳と相似形であることや石室もわかり、樹立した円筒埴輪も検出されました。

それから、関連行事としまして、平成24年11月４日（日）に芝山文化センターを会場にしまして「はにわサミットin芝山2012」を開催いたしました。内容は、基調講演が早稲田大学の城倉正祥専任講師によります「九十九里古墳調査の最前線」、基調報告が今城塚古代歴史館の森田克行館長によります「今城塚古墳の整備と活用」にいたしました。今城塚古墳は、大阪府高槻市にありまして継体天皇の陵墓ではないかということで、話題になっています。高槻市では、はにわのゆるキャラ「はにたん」をマスコットキャラクターにしてPRしています。その後、アトラクションとしまして、はにわ祭国造による「御託宣」、芝山中学校生徒による「巫女の舞」を行い、最後に「はにわを活かしたまちづくり」をテーマにパネルディスカッションを行いました。パネリストとして、埼玉県本庄市商工会議所事務局長の川上芳男氏、大阪府高槻市今城塚古代歴史館館長の森田克行氏、芝山はにわ祭実行委員長の木内昭博氏、芝山はにわ祭国造の荒井紀人氏、芝山はにわ祭実行委員の稲垣弘氏にお願いいたしました。このはにわサミットは、平成23年に埼玉県本庄市が開催しまして、それに芝山町も参加いたしまして、次は芝山町でということになりました。本庄市では、やはり「はにぽん」というゆるキャラを作っております。芝山町でも現在ゆるキャラの公募をしていて、４月には決まる予定になっています。

それから、空港問題と関わってきますが、「成田空港空と大地の歴史館」という施設が平成23年に開館しまして、成田空港問題の経緯などを紹介しています。成田国際空港株式会社の運営になっております。私もそ

の運営を検討する委員として関わっております。場所は、芝山町にあります航空科学博物館の敷地に建てられました。こちらでも「はにわ祭ポスター展」を実施しています。

企画展の役割分担についてですが、展示の企画立案は、Ⅰ章が町立博物館、Ⅱ～Ⅴ章は早稲田大学考古学研究室で作成した原案をもとに、町立博物館と観音教寺で協議しました。資料調査や収集は、町立博物館では町史編さん室収集資料、写真、新聞記事、観音教寺では当時の関係資料、出土遺物、写真、早稲田大学では当時の関係資料、図面、写真、日誌等を中心に行いました。展示分担は、町立博物館が、はにわ祭ポスター展、昭和31年の殿塚・姫塚古墳発掘調査の様子が伺える資料、本年度実施された早大による測量調査の成果、高田２号墳出土はにわなどを紹介しました。観音教寺の博物館では、はにわ祭のきっかけ、殿塚・姫塚古墳発掘の経緯やはにわの保存と活用の取り組みを紹介しています。また、殿塚・姫塚古墳出土はにわを常設展示していますので、併せてみることで、当時の発掘の様子が再現できたのではないかと思います。そして、図録の編集は早稲田大学にお願いしまして、執筆は早稲田大学の教員や大学院生・学生と私で分担して行いました。企画展期間中は、200円の共通入館券を作りまして、中学生以下は無料といたしました。企画展に係る費用は町立博物館と観音教寺で折半して負担いたしました。はにわサミットにつきましても、この三者による協力関係のもと行いました。

最後に、合同企画展の成果と課題について、私の感想になってしまう部分もありますがお話したいと思います。

成果としましては、殿塚・姫塚古墳の調査成果を最新の研究成果をもとに再検証することができ、資料保存状況の確認ができましたので、散逸していた資料も統一して把握することができました。これによって、報告書の刊行に向けて準備ができたのではないかと思います。それから、合同することによりまして、展示内容を充実できましたし、費用の分担をすることができたのは、メリットと言えると思います。

課題につきましては、連携のあり方としまして、企画展の立案や準備にあたっての十分な協議時間が取りにくいなかで、意思の疎通をどう図っていくかということがあります。

今回は、大学が夏休みにこちらで合宿をして調査をしていましたので、その間は話し合いができましたが、その後は、私の方で何回か大学に伺って調整しました。その中で、それぞれの特色や専門性をどう活かしていくか、連携のあり方の難しさは感じました。展示の方法という面では、展示会場が二館に渡ったため、来館者へのストーリーづくりが難しいのと、お客さんにとっては不便を感じることもあったかと思います。合同でやる場合の展示の分担のあり方も難しいなと感じました。それから、地域住民の反応という面では、町民の来場者が意外に少なかった印象があります。当時を知っていて、いらっしゃた方はありましたが、芝山イコールはにわということで、逆に身近になっているだけに文化財としての価値が見過ごされている現状があるのではないかと思います。

最後に、今後に向けてですが、せっかく今回こういう形で協力関係ができましたので、今後もその関係を続けていければと思います。殿塚・姫塚古墳につきましては、調査・整備・活用とまだまだ課題がありますので、それを一歩ずつでも進めていければと思います。それから、地域住民にもう一度古墳やはにわに関心をもってもらう、日野市さんの方では住民の方と一緒に調査研究をしていらっしゃいますが、私どもの方ではそれがまだできていません。博物館には友の会がありまして、80名くらいの会員がおりますが、常に行事に参加していただけるのは15人くらいですが、そういった方々に呼びかけていきたいと思います。その方々は、今回の大学の調査でも協力をいただきましたので、さらに広めていければと思っています。はにわを地域の文化財として観光、まちづくり、地域の活性化のためにどう活かしていくのか、芝山町は空港との関係もありますが、そういった面も含めてもう一度見直して、考えていけたらと思っています。

以上で終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

質　疑　・　討　論

パネラー　中山　弘樹
　　奥住　　淳
司　　会　尾﨑　　晃

司会：それでは討論、質疑応答から始めたいと思います。中山さんの話は、職員が減らされる、また新撰組という中心テーマを観光に利用するために館が移動させられたということで、マイナス要因の中から入館者が減ってしまい、どうやって入館者を増やしたのか、リピーターの確保に取り組んだことや、入館者の回復をはかり、入館者数の確保にたいする努力をされたというご報告でした。

奥住さんの方は、祭りをきっかけにして、成田空港の闘争という町にとっての負の遺産を解消していく、寺が中心となって博物館や行政や大学もあわせて、町全体が取り込んでいき、町おこしをしていった、成功例だということを感じました。

では、みなさんから質問を承りたいと思います。

久野：ボランティアを使って戦争の聞き取り調査をしたのですが、聞き取りする人が亡くなってしまったので、友の会のメンバーで戦争で亡くなった方のお墓の調査を行ってきました。15人で始めたのですが、今では２～３人で年に数回もできない状況です。

ボランティアや友の会など、お金ではなく知的好奇心で集まっている場合、初めはよいが次第に人数が減ってきてしまいます。それに対しどのような対策をしているのかお教え下さい。

中山：いろんなテーマでやっているのと、今年度の活動方針を決める際に、個々の興味のあるものをテーマに取り込み、楽しみながらやっていけるようにしています。飲み会をするなどして、それぞれ楽しみながらやっています。

久野：お墓の調査はしんどい作業なので、気合い入れないといけないときは、自分も一緒に行かないといけないので、もうちょっと緩く飲み会などもやっていかなきゃだめなのかと反省しました。

司会：久野さんの質問は核心をついています。職員がどのくらい関わっていくのでしょうか

中山：突っ込んで行く職員も必要ですが、一歩引いて自主性をもってやってもらっています。

司会：他にこのような活動でご苦労されている館さんもおられるかと思いますが、何かありませんか？なければまた質問をお願いします。

挨拶する上野千葉県立中央博物館長

立和名：人口と利用者数やその市内市外の割合、市民活動のリピーターになっている方の年齢について教えて下さい？

中山：人口は178,596人、市内市外の割合についての統計はありません。特別展の時には市外から２～３割、他はほぼ市民です。ボランティアもほぼ市民ですが、八王子や多摩からも数人来ています。年齢層は60代以上で、たまに大学院生が入ってきたり、数人30～40代もいます。

エコライフ倶楽部は、小さい子どもを持つ30代が中心です。

上野：まず予算の関係についてですが、オープンから平成23年の間で予算が増えたようですが、その委託料の個々のグループごとへの金額を教えて下さい。また今後のグループの運営方法や在り方はどうなっているのでしょうか？

中山：2011年度の委託費はエコライフクラブ・年間48万、勝五郎生まれ変わり物語探求調査団には33.2万、七生丘陵調査団10万、日野市のあゆみ50年調査団40万です。幻の真慈悲寺調査の会は委託ではなくという会の希望があったので消耗品や印刷費用のみで委託費は０、他は委託費０です。

今後はどうしていこうかという点で「日野市のあゆみ」は、来年50年の企画展が終わった段階で博物館は

手を離す予定です。

勝五郎生まれ変わり物語探求調査団も何年か後に記念の年なので、そこまではがんばってその後に整理しようと思ってます。整理した後何をするかは、旧家の代替わりが盛んなので、古本屋に出てしまうなどの文書の散逸が進んでるので、緊急に今後は旧家の古文書のある家の文書調査や寄託の申請などに取り組んでいくつもりです。

司会：上野さんの質問にも関連しますが、日野市さんで市民グループを整理していく理由は？職員の対応が大変だからでしょうか？本来の古文書調査など館の業務をしていかないといけないからでしょうか？

中山：大変なのもありますが、他の仕事が出来ないので、重点的に古文書調査・展示・レファレンス・資料調査やデジタルミュージアムなど、やらないといけないことも多く手が回らないので、人を増やすか事業を整理していかないとにっちもさっちもいかないので、やるべきことを意図的に選択してやっていくということです。

司会：２人の職員でやっているので大変さが伺えるところですが他の方から質問は？

清藤：予算に非常勤の人件費は入っていますか？予算は事業費として考えていいのですか？光熱水費はどうですか？

中山：臨時職員の人件費は除いています。館の施設は教育センターと公民館で共同使用しているので、水道代などもこれらを管理している教育センターから出ているので予算には入っていません。事業費のみです。昨年度事業費が膨らんだのは、映像を毎年撮っているので、企画展における編集費で130万円、毎年の発掘調査の業務支援などが95万円入っていたり、古文書のマイクロフィルムのデジタル化も委託費が87万円でていたりで膨らんでいます。

清藤：同好会やボランティアに委託費を払っているところは他にありますか？

司会：千葉県は０ということですか？

上野：中央博物館では生態園があり、解説業務委託をかつては友の会にお願いしていましたが、事務監査で不適切であると指摘を受けてダメになって入札とした経緯があります。

清藤：歩みと課題のところで広報宣伝体勢の充実。これはどこでも課題としてあるのですが、良い方法があれば教えて下さい。

会場風景

中山：委託費は市レベルの監査だと指摘を受けたことがありません。内部的には様々な意見がありますが、都の補助金などは流用していないので問題になったことはありません。一方で、予算計上して印刷消耗品費などでやると大変なこともあり、委託費として逃げたということが本音です。

広報宣伝費は、身動きがとれれば自分たちでやっています。自分たちでチラシを配りにいければやりますが、化石の観察会で、市の広報に載せてもらったんですが人が集まらず、小学校にチラシ持って行って配ってもらったら、50名位申し込みがきて断ったくらいです。ピンポイントで子ども向けとかエリアが限られる宣伝は人海戦術で出来ますが、それ以外はどうしていくかというのが悩みの種です。

司会：広報の問題は悩む問題だと思います。効率の良い広報はどの館でも悩みだと思いますね。

奥住さんに伺いたいのですが、レジュメの最後に課題を挙げていますが、地域住民との協働、身近な文化財の価値が見過ごされている現状とあります。報告を聞いていると地元と結びついていると思いますが、多くの人が祭りに参加しているにもかかわらず、わざわざ問題として取り上げられているのは、企画展に来られている人が少ないからですか？関心を高めていかないといけないと思っているからでしょうか？

奥住：企画展に来られている人に町民層が少なかったんです。芝山＝埴輪と町内の人は分かっていても、実際には若い人は殿塚・姫塚古墳に行ったことがない人が多いんです。祭りの時に初めて行くと言う人が多いんです。昭和30年代に掘ったことは伝えられていますが、そのすごさが認識されていない。埴輪道を通ったりもしますが、お寺さんの本物の埴輪を見たことがなかったりします。自分は野田の出身ですが、野田＝醤

油って何とも思わないですけど、他からはすごいねっていわれます。芝山の場合も友の会で埼玉の行田に行ったりしますが、埴輪祭りやっているよねって言われます。外から言われると再認識します。芝山の埴輪ってやっぱりすごいんだなって。50年前のものだけど見慣れてしまっているのか、認識されていないのかなって思いました。

司会：地元の地域文化の掘り起こしに皆さん力を入れていると思いますが、睦沢町では地域文化の掘り起こしに特に力を入れていると思いますが、どう工夫しておられますか？

久野：地域に住んでいると馴染んじゃって、なんとも思わなくなります。富士山の近くの人は、富士山を毎日見ていると、何とも思いません。これが人間の本性なら文化財も同じです。自分もよそ者なので、千葉に来てカルチャーショックを受けました。見るもの聞くもの面白かったです。自分が面白いと思うものを人も面白いと思うのではないでしょうか？

１人で歩くのではなくて、みんなで行こうということで「時速４㎞で歩く日本の歴史‥」を20年近くやっています。小字単位の地域をウロウロ１日歩いていると、石造物が建っていたり、古文書持っている家などがあって、面白いものが多く１日では見切れないほどあり、また、地元の住民にも注目されて、寄ってきて教えてくれます。睦沢町を踏破しましたが、自分自身が勉強になりました。よその人の視点でみた方がいいと思います。奥住さんが苦労しているのは私のところと同じで、東京行こうというと、みんな集まるけれど、地元を見て歩こうというとあまり興味を示しません。でも、実地で文化財の見方を教えてあげて、文化財の見方が分かってくると面白くなります。実地で見方楽しみ方を教えてあげる必要性があると思います。

司会：細かなイベントを数多く打つ、こまめにやる必要性があるということですが、他の館では地域の方にどのように伝えているのでしょうか？

立和名：昨年まで県内の歴史文化資源を多くの人に知ってもらうという魅力発信室に兼務していて、久野さんにもお世話になったのですが、地域の魅力に気づいていない人も多くて、それは地域の博物館に負うところも多くて、久野さんの所のようにコアなファンを育ててくれている地域は成功しています。

私は、芝山はにわ祭のほうのお仕事もさせてもらっていたのですが、芝山町では、はにわ祭は、はにわの

久野氏

装束をきて一日歩くっていうのは知っているけど、なんで芝山ではにわ祭をやるのか知らない人が多いですね。観光協会でピーアールをしにきている若い人も知らない人が多いです。芝山はにわ祭も産業祭りとかで人がそこそこ集まってくるけど、その埴輪色や地域の歴史色が見えて来ません。見せ方として、地元にある良い資源が、イベントとして連動した取り組みになっていないと思います。30回の節目で注目されましたが、発掘されたんだよっていうことが外に発信する方には出てきていなかったと思います。県の観光課の問題でもあったのですけど、博物館が地元に浸透していないと思います。

ところで、料金は200円のみですが、寺が損しているのではないですか？連動するなら苦労も共有するのが大事なのではないでしょうか？

奥住：入館料は両方見て200円です。

立和名：両方見て200円だと仁王尊さんは損しちゃうと思うのですが、好意に甘えているのですか？

稲垣：好意というよりも、芝山の埴輪は、町内の人は埴輪っていうけど、発掘してから，時間が経って忘れかけているというのが実感です。はにわ祭は町内のごく一部の人の祭りという印象があります。産業祭りが同時に行われるので大根を買いに来る人や餅を拾いに来ますが、昇天の儀は見ないですぐ帰ってしまいます。どういう人が掘ったのかとか、はにわ祭の起源がこういうものであって、つなげていかなければならないということを町民に知ってもらうために、祭りについても知ってもらうために、両館を見ていただきたいという考えで、奥住さんと話をしました。皆さんが入りやすい値段ということで料金は決めました。来館の町内の方にこれらを再認識してもらえたのかは不安で、さらに時間をかけて内容の深いものを考えていければい

いかと思っています。

司会：地元にどれだけ結びつき発信していけるのか、ということで、立和名さんは観光とイベントがうまく結びついていかないといけない、稲垣さんは、結びついても理解してないということで、本来、博物館は文化や情報を発信し、地域の人たちに見せていく場なので、地域の人達に理解出来るようになっていないのではないか？と思えてきますが、中山さんはどのようにお考えでしょうか？

中山：文化財の価値を伝えていくのに学校教育に介入していく必要性があると思います。勝五郎生まれ変わり事業と真慈悲寺の事業などは学校の副読本に取り上げてもらったり、こちらからも事業やるのでぜひ利用してくれと教員が集まる場などでPRしています。授業して欲しいとか、フィールドワークしてほしいとか例年１～２校の依頼があります。こういう活動をコツコツするのも大切です。

司会：子どもの頃から教育していく必要性があるということですね。

久野：睦沢町では入館者は年間5,000人。人口が7,000人。人口６割の入館者になる。この内1,000人が小学校から来ています。11月～２月に30校位学校が来ています。展示解説など60回やりました。博物館や展示物の見方や文化財の見方をやりました。ものの見方やマナーを教えます。子どもは１回で覚えます。資料でも自分達に身近な物を見てもらい、興味をもってもらいます。その辺の家にある銘品、大した物ではないけど、売り込み方で銘品に見えます。違う目で売り込みをしてみましょう。皆さんの収蔵品も売り込みを工夫すれば必ず売れます。

司会：日野市の中山さんの話からは、教育とか、売り込みなど上から目線ではなくて、下からわき上がってきたものを、うまく利用していますね。市民が何を必要としているのか？市民があれやりたい、これやりたいということを博物館が長くサポートしていけるわけですが、そのように工夫されたのでしょうか？

中山：もともと日野市は農村でした。そこに新しい人が入ってきた地域です。地元の旧家の人は、こういう調査などには入って来ません。新しいリタイア世代が地域デビューで入って来ます。日野市自体が市民協働を謳っていて、こういう運動が盛んです。市民活動に慣れている人が多いです。委託費などの支援も多くて、郷土博物館の活動だけが突出しているわけではありません。

司会：日野は都市部だから市民が育つのかと思ったのですが、千葉県の場合の都市部はどうでしょうか？市川の松本さんいかがでしょうか？

松本：市川市は日野市の事例とほぼ同じで、リピーターさんのほとんどは勤め人の方でリタイア世代が多いです。千葉都民として東京に働きに行っていた人がほとんどです。地元を知らないからということで来てくれます。入館者数だけではやっていけないので、外に出て行こうということで、利用者数を増やそうとしています。歴史カレッジという２年のものも広報を見て人が集まってくれたのですが、千葉都民が８～９割を占めます。友の会とかに加わってくれるのは、地元民より千葉都民が多いです。リピーターさんはシニア世代の人が多いけど、事故の時はどうしているのか伺いたいと思います。私が異動してきて、８～９年で救急搬送の事故も外を歩いていて３件起きています。市川から印西市内までの古墳巡りをしていますが、亡くなった方も出てしまいました。その辺の問題意識や、保険はどうしているのでしょうか？

中山：参加する方は、市の行事保険に一括で入っているので、対応するようにリストを作っています。グループに入っている方は毎日接していると、それぞれ

松本氏

白熱した討論風景

の健康状態が分かるので、お互い無理しないように気をつけています。特別な行事、現地散策など電話での応募には、年齢確認、健康や足腰の確認をしています。きつそうだとなると辞める方もいますが、別ルートや車を用意します。不幸な事故はまだありません。

司会：時間が押しているのですが、どうしても聞いておきたいことがあれば伺います。

佐藤：新しく空港関係の展示施設をつくったということで、空港会社さんも地域との協働を考えているなら、三つ巴でなにか出来ないでしょうか？空港の中で、芝山の埴輪展が出来ればインターナショナルな展示ができるのではないかと考えています。奥住さんが考えられていることを教えて下さい。

中山さんには、コンコースでやっている展示は、博物館内でも展示してはいかがでしょうか？博物館で関わっている団体でもありながら蚊帳の外ではいかがなものかなと思いました。

奥住：空と台地の歴史館、元々は賛成反対で揺れた歴史を風化させないようにということでできたものです。賛成派反対派関係なく平等の目で資料を展示しています。運営委員には賛成と反対の人や行政の人も加わっています。今後も空港で運営してくれていますが、学芸員がいないので、運営に困っていると言う話があり、うちとの連携展示ができて、地域の歴史の発表の場として、ミニ展示の場として活用できればいいなと思っています。芝山は日野市さんと違って都市部と農村部の違いもあるのかなと思いますが、地域住民との関わりとか、考古のありかたなど考えていかないといけないと感じることがありました。

中山：うちでは人が来ないから、駅に近い図書館の２階で展示しようと課長が言ったこともあります。駅のコンコースだとパネルは並べられるがモノが並べられないので、再構成し博物館でモノをならべた展示をする予定です。秋に七尾丘陵調査団の人と自然について展示をしまして、４月からこの七尾丘陵調査団の以前やったパネル展示を再構成し、展示をする予定です。

小高：一つは新撰組のほうの利用者数と行政評価はいかがでしょうか？また、市民グループ活動の利用者数はどのようにカウントしていますか？

中山：新撰組のふるさと歴史館の方は、データを用意できませんでしたが、利用者は最初の頃は、数万単位でしたけれど、ここ数年はマンネリ化しています。新撰組についてはコアなファンがいるので、企画展示をすればリピーターはいます。評価について気になっていますが、今回は用意出来ていません。観光の目玉にしたいというのは変わらないですが、市長選が夏にあるので、市長が替わるとその方向も変わるかもしれませんが、観光施設として存在はしていくと思います。

市民グループの活動も入館者数に入れています。

司会：まだ議論の方は尽きないかと思いますが、時間がだいぶ超過してしまいました。本日の討論を終了させていただきたいと思います。閉会に当たりまして、八千代市立郷土博物館館長　調査研究委員会の清藤理事よりご挨拶いたします。

清藤：年度末のお忙しい中、お集まりいただきありがとうございました。本日の講師である日野市郷土資料館の中山さんと芝山町立芝山古墳・はにわ博物館の奥住さん、本当にありがとうございました。

千葉県博物館協会調査研究委員会は今年度来年度、お手元の資料に書いてあるテーマで続けて事業させてもらいます。今年度は中間報告としてこのような会を催させていただきました。こういった会を踏まえまして、来年度進歩した内容でシンポジュームあるいは「ミュージアムちば」の刊行などに邁進させていただきたいと思います。みなさん、また今後ともよろしくお願いいたしまして今日の会を終わらせていただきます。

平成25年度視察報告

視察１　成 田 羊 羹 資 料 館

千葉県立関宿城博物館　尾﨑　　晃

１　視察の目的

平成25年９月６日（金）に成田市にある成田羊羹資料館を訪れた。これは昨年度から調査研究委員会が設定した調査テーマである「博物館・美術館の地域にできること－協働・共生を目指して－」に基づき、今年度は地元企業との関係を検討するためである。案内は米屋株式会社営業企画課の宮内智調査役に依頼した。

２　成田羊羹資料館の概要

成田羊羹資料館は房総でも指折りの老舗「米屋」が、平成14年に総本店建て替え時に総本店の裏に羊羹文化と米屋の歴史を伝える目的で博物館を開館した。羊羹単独の博物館（資料館）は全国でこちらと佐賀市の２つだけという大変ユニークな存在である。

企業博物館の使命から館名に「米屋」の名を冠すべきところを、敢えて会社名を出さず成田という地名を表に掲げた理由は、成田という地域と羊羹を中心とした菓子文化を伝える場にしたいという意図からだという。入館料は無料。平成24年度に入館者数25万人を超えた。建物は２階建てで１階が受付と企画展示室で、２階が常設展示室となっている。

企画展示は年に２回行い、これまで21回開催している。視察した時は「成田の風景いまむかし」を開催中であった。企画展のテーマは羊羹の歴史や、その製作に関するものの他に、成田の歴史や参道で売られている土産など多岐にわたる。また、常設展示は創業者の諸岡長蔵の紹介と羊羹の歴史・製作道具・米屋の看板などが展示され、羊羹がどのようにして作られ、米屋がどのような経緯で現在に至っているのかが解るようになっている。

成田羊羹資料館外観

３　地域への貢献

２階の常設展示室風景

同館では地域への密着を高めるため米屋総本店の２階を成田生涯市民学習ギャラリーとして開放し、週替わりで近隣のサークル活動の発表の場として提供している。また毎週お菓子教室を開催し和菓子作りの体験を行っている。これは月により親子を対象に実施したり、日本文化に親しんでもらうため海外の学生にもこの教室も開催している。この他総本店敷地内のお不動様旧跡庭園で野点の茶会を毎年開催している。

４　自治体博物館との連携

同館には専門の学芸員がおらず、資料の収集と整理が十分でないことや、他の博物館の情報が不足し、資料借用の困難さから新しい企画展の実施が年々難しくなってきているという。展示資料だけでなく収蔵資料管理等の面でも他館の協力が得られれば、館としての事業が活性化するとのことだった。

同館の展示内容は大変面白く且つ解り易いものであり、お菓子教室を始めとする地域への普及活動への熱心さは、地域に深く根ざしてきた老舗ならではのものと感心した。菓子と成田というテーマだけで21回もの企画展を実施してきた背景には、同館がこれまで収集に努めてきた資料とそれに関する詳細な調査研究成果があるものと推察される。

これまで博物館は地元企業とあまり強い連携を持ってこなかった。しかし企業の中には今回のように高い文化性を有する所があり、地域に深く根ざしている。企業活動そのものが「歴史」であり「文化」と見ることが出来よう。博物館ももっと企業と正面から向き合っていかねばならないと思われた視察であった。

視察２　千葉経済大学地域経済博物館の視察報告

千葉県立関宿城博物館　尾﨑　　晃

１　視察の目的

千葉経済大学地域経済博物館の入口

平成25年９月６日（金）千葉市稲毛区の千葉経済大学内にある地域経済博物館を訪れた。同館はかつて千葉県立総南博物館に学芸員として長く勤務され、その後大学で博物館学芸員養成に従事されている同大学経済学部の菅根幸裕教授の尽力で設立された。菅根教授の案内で同館を見学し、大学と博物館の両方を熟知されている視点から、大学と博物館の連携について伺った。

２　千葉経済大学地域経済博物館の概要

千葉経済大学地域経済博物館は平成22年に同大学の図書館を改装して作られた。博物館というよりは博物館相当施設である。経済学部にあって学芸員課程の学生の学内実習生施設と、一般の人向けに経済を解りやすく解説する展示を行うために作られた。実体経済を展示という形で直接表現することは非常に難しいため、「近世江戸地廻り経済圏と房総の名主たち」という江戸時代の経済に即してテーマ設定をしている。展示されているものは古文書が中心で、酒造業や漁業・炭生産等の文書や道具等が展示されている他、刀や甲冑などの物が展示されている。

館内では学生の調査成果を発表するため年１回調査実習企画展を開催している。これまで「川名登の歩いた世界」「村にあった銀行」等のテーマで行った。入館者数は１年間で約1,500人。殆どが学生である。割合は少ないが一般の方の来館もあるという。

３　学内博物館での実習の問題点

通常博物館学芸員の資格取得のためには実際の博物館に10日前後の館務実習に参加しなければならない。

しかし学内に博物館相当施設がある同大学では、調査実習の成果を展示する企画展の実施は別として、大抵の場合学内で短期間に手軽な博物館実習が可能である。あまりに学内に手頃な実習施設を作ったことで、学生が実社会で経験を積まずに資格だけを取れてしまうことを菅根教授は危惧するようになり、敢えて学生には学外の博物館での実習を勧めているという。

同館展示室風景

４　大学（学部）の特性と博物館との関係について

経済学部内にある同館は、学芸員資格取得のための学内実習施設の面と、学内外への学問分野の解説施設の二つの役割を持たされている。しかし経済学部という性格から展示内容は自ずと限られたものとなり、類似する展示テーマを掲げる博物館も殆ど見かけられないことから、他の博物館から資料借用などの必要性も感じていない。その他には学生の実習先を依頼する程度である。

学内博物館は大学もしくは学部の特徴を反映するものであり、博物館との連携の必要性を感じない所もあって当然であろう。では学内博物館から離れて、大学として考えた場合、本当に博物館は必要もなく魅力を感じない施設だろうか。

大学の学部・学科や学問分野、または大学の所在する地域によって、博物館が持っている資料や情報・人材や施設、これまでの実績・ノウハウといったものに興味や必要性を持たれることもあるのではなかろうか。それは博物館からも大学に対して同様のことが言えるかもしれない。博物館と大学は互いの情報を開示し合うことで、今後多様な交流や連携事業が展開できる可能性を持っていると思われる。外から見て何が博物館の魅力として映るのか。我々は外からの視点で自分達の館を見直す必要性を今回の視察で強く意識した。

視察３　和洋女子大学文化資料館

八千代市立郷土博物館　森　　竜哉

１　視察の目的

平成25年11月７日（木）に市川市国府台の和洋女子大学内にある文化資料館に伺った。これは、今年度の研究報告会のテーマに沿った活動を、本学駒見先生が積極的に行われているということを周辺より聞いたからで、より具体的なお話を報告いただければとお願いにあがったと共に、本館の見学を目的としている。当日は、駒見先生自らご案内いただいた。

２　和洋女子大学文化資料館の概要

本館は昭和53年４月に、キャンパス内の遺跡調査で出土した遺物公開を目的として、大学内に資料室が開設されたことを契機とし、平成４年４月に文化資料館が開館された。さらに平成13年６月、新築された大学東館17階にリニューアルした形でオープンしている。収蔵資料は、埋蔵文化財のほか服飾手芸関連・書蹟・古美術などで多岐にわたって展示している。窓側のオープンスペースでは、校地内の遺跡から出土した奈良三彩小壺・人面墨画土器・緑釉唾壺等下総国府域ならではの展示品が見られ、圧巻とした思いであった。17階からの眺望は一見の価値ありで、国分台から見下ろす江戸川に悠久の歴史を感じとることができた。展示テーマに「風と出会う」として、歴史だけではなく文学・自然・癒しの風を体感してもらうことを目指していることが十分伝わってきた。展示は、年間10～13回程度の企画展・ミニ企画展・特別展が行われており、博物館や学生についての姿勢が、本学の教育機関としての水準を高めている形として受け止めることができる。

展示風景

３　学芸員課程での取り組み

資料室設置の翌年の昭和54年に学芸員課程が開設され、現在、博物館実習の一環として、展示実習の立案から開催までを学生が主体的に行い、企画展が実施されている。また、学内での館務実習のみでなく、学外の博物館での実習に臨んでいる学生が見られることは、学生の意識がより対外的に向かっていると感じられた。

さらに、博物館見学実習では地方にまで足を伸ばし、多種の博物館の見学を実施し、学生自身の視点による博物館の評価を行っていることは、学生の主体性を促す学内の取り組みを感じた。

企画展示風景

４　大学博物館と地域連携について

駒見先生からは、学生に関わる教育的側面と地域に視点を向けた団体との連携についてお話を伺った。

教育的側面については、市内小学校や他地域の学校を対象とした学校出前の実施でのお話をお聞きした。学生に、学校側と授業展開のための事前学習の段階から関わらせて、どのようにすれば子どもたちに興味を持ってもらえるか、理解してもらうかを意識して進めているというものであった。ワークショップの実施や館所蔵の土器を実際に触れてもらうことなど博物館でなければできないことを実践されていて、人との関わりを重要とする学芸員の基本を推進していると思った。また、大学博物館という特徴から、地域を超えた都内の特別支援学校での出前も実施しているとのお話であった。

地域団体との連携では、市内の「市川案内人の会」との関わりをお聞きした。また、隣県の茨城県五霞町の縄文貝塚について、この町には博物館がなく、公民館において出土品の展示をしているが、その認知度をさらに上げたい。町側との連携により、よりよい公開方法を推進しているというものであった。ここにおいても、大学博物館ならではの特性を活かしていると思う。

駒見先生からは、研究報告会での発表について、快諾いただき、有意義な視察となった。

平成25年度千葉県博物館協会研究報告会

名　　称　平成25年度千葉県博物館協会研究報告会

テ　ー　マ　「博物館・美術館が地域にできること－協働・共生を目指して－」

主　　催　千葉県博物館協会調査研究委員会

日　　時　平成25年12月20日（金）午後１時30分～午後４時30分

会　　場　八千代市立郷土博物館　学習室

内容・日程

開 催 挨 拶　千葉県博物館協会会長　堀田　弘文（千葉県立中央博物館館長）
千葉県博物館協会理事　清藤　一順（八千代市立郷土博物館長）
（調査研究委員会）

報　告　1　大学と博物館の連携の現状と課題－東京成徳大学の事例から－
青柳　隆志（東京成徳大学人文学部教授）

報　告　2　大学博物館活動と地域連携－和洋女子大学の活動から－
駒見　和夫（和洋女子大学言語・文学系教授）
［和洋女子大学文化資料館］

報　告　3　企業博物館と地域連携の課題
宮内　　智（米屋株式会社営業企画課調査役）
［成田羊羹資料館］

質疑・討論　コメンテーター：菅根　幸裕（千葉経済大学経済学部教授）
森田　利仁（千葉県立現代産業科学館普及課長）
パ　ネ　ラ　ー：青柳　隆志・駒見　和夫・宮内　　智
司　　会：尾﨑　　晃（千葉県立関宿城博物館主任上席研究員）

報告１　大学と博物館の連携の現状と課題－東京成徳大学の事例から－

東京成徳大学人文学部教授　青柳　隆志

青柳でございます。どうぞよろしくお願いします。私どもの大学は、八千代市の保品というところにございまして、博物館からは車で10分位です。歩くと少しかかりますが。直近の大学ということで、今日はお招きをお受けいたしました。先ほど司会者の方から、博物館と大学の関係について、まずは第一義的には人と人との繋がりであって、そこから組織的繋がりとなるというお話がありましたが、私どもも、どちらかというと人と人との繋がりのほうから、だんだん関係が密になっていったというタイプになります。これはどこの博物館でも多かれ少なかれあることだと思いますが、そういった事例の一つとしてお聞きいただきたいというのが主旨です。

私どもの大学は八千代市立郷土博物館と同じ、平成５年の開学でございまして、今年で、二十歳ということになります。当初は、人文学部のみの単科大学で、学芸員課程もなかったのですが、ご多分にもれず色々と募集が大変だということで、改組をいたしまして、学部が増えたり、色々な変更をいたしました。私どもの人文学部も日本語・日本文化学科がありましたが、こういうのは流行らないということで、「日本伝統文化学科」というのをつくりました。本学の総務課長が、日本中の大学、世界中の大学を全部調べましたが、日本伝統文化学科というのはどこにも存在しない。日本で唯一とのことです。もちろん日本文化学科というのは日本中たくさんございます。伝統文化学科も京都にいくつかありますが、日本伝統文化学科と名乗るからには色々伝統文化についてやらなければならない。その一環といたしまして、博物館学芸員の養成に着手いたしました。私は本来、同じ学園の系列校におりましたが、学芸員課程を創設するということで呼ばれましてこちらに着任しました。平成15年から学芸員課程ができましたが、私は学芸員資格をもっておりません。資格をもっていない人間が教育に関わる苦労というのは、もし同じようなことをやった方はご想像がつくと思いますが、本当に一から立ち上げました。一番、ご協力いただいたのは、鶴見大学の文化財学科で、色々講習をしていただいて、なんとか形にいたしました。そういう人間にとって一番こわいのは、実習先です。どうしたらいいものか。まず博物館実習を受けていませんから、どういうものかがよくわからない。それから、受け入れてくださる所があるのか。電話などをいたします。国立歴史民俗博物館では「実習はやっておりません。」と言われ、色々な博物館にお聞きして、その経過の中で、一番近い博物館が八千代市立郷土博物館ですので、あいさつには伺っていましたが、まだその段階では、実習生を１人お願いしますという関係でした。司会者の方もおっしゃっておりましたが、そのときはまだ「一方的な関係」といっていいポジションだったと思います。ところが、組織の繋がり以前の人と人との縁ということでしょうか、当時いらっしゃった佐藤学芸員と大学との面白い関係が平成15年から始まりました。佐藤さんとは同年齢ということもあり、色々な企画があって、こういったことはできないかという話のなかで、できるかなあということが深まりまして色々なことをやるようになりました。ということで、時系列的にみていこうと思います。

〔スライド説明〕

平成15年から、博物館実習をするようになりました。

これは学科のポスターです。博物館では博物館実習もやりますし、実習生全員を連れてきて、これはパネル貼りの実習をしているところです。こちらは近いので、実習生の基礎実習をさせていただいています。そうした流れから、大学のリソースとして何があるか。私どもの大学では、平安装束を持っておりまして、衣装を着せるという授業があります。伝統文化（装束）という授業で、半年間で束帯から十二単まで、他に平安装束及び甲冑を一通り全部きちんと着付けられるようにする授業があります。これを市民向けにどうでしょうという話が盛り上がったところで、やってみましょう、ということで始めましたのが「平安朝装束体験」です。これは博物館の学習室ですが、左は武官の束帯、右はいわゆる十二単です。市民の皆さんに来て

いただく。これが市の広報に公開されますと大変な評判になり、以来これは平成16年から始まりまして、10年間毎年実施しております。この武官束帯は１着、着付けるのに20分かかります。これを学生が行いますが、伝統文化（装束）という授業をとって、なおかつ博物館実習に参加するという学生が、直接こちらにきて市民の方々に着付けるということになります。１日の場合と２日の場合がございますが、およそ30～60名の市民、家族連れの方に大好評です。だいたい２月頃に行いますので、ひな祭りが近いです。そうなりますと、還暦の記念に、一生に一度は着てみたいのでという方がいっぱいいらっしゃって、こういうお写真を撮りますと、ああこれでいつ死んでも悔いはないというお話もあります（死なれても困るのですが）。こういうお写真を撮っております。これは市民に向けての還元であると同時に学生にとりましても、非常に重要な体験となります。これはいってみれば、接客体験です。装束の着付けは相手の体に触らなければなりません。そういたしますと、不用意なことはできません。無言でやりましても，冷たい関係になります。話しかけが必要で、そのときに装束の知識や相手に対する心遣いがないといけない。そういった作法的な部分も含め、１年間学んだことが、ここでできれば、実習として行えるという非常に大きなメリットとなります。私どもがこの装束体験を重視しておりまして、後で述べますが、小中学校など色々出て、年間20回ほど行っておりますが、ここで一度きちんとやって、それをベースにして小中学校に出て行く。つまり、座学であるいは学内でやっているより、何十倍のことを１日でやっている訳です。そういったメリットが非常にあります。ですから、大学のリソースといいますが、フィードバックがかなり大きい。基本的な大きな授業と考えています。これに味をしめたというと変ですが、もう一つ何かやらないかということになり、日本伝統文化学科ですから色々なことをやっています。三味線やお茶、お花をやったり、その中で雅楽というものがあります。全員必修ではありませんが、笙・篳篥・龍笛の内、その一つを学んで実際に演奏できるまで行うものです。それであれば、そのリソースを提供して、ご覧いただくことができる。私どもの大学で指導いただいている上野雅楽会は、東京芸術大学のOBで構成されていますが、そちらの方で、市民向けにまず体験、それから演奏いただくということでやらせてもらうことになりました。これは体験の方でございますが、図書資料室で笙を体験いただいてます。笙は１台50万円以上する高価な楽器で、本学では全て本物を用意して、壊れたら壊れたでしょうがない。あまり宝物のようにして触らないというより、使用することが有意義であると考えています。かなりの台数を用意しておりまして、これを市民の方に触っていただいて、演奏して体験してもらおうということです。午前中に体験いただき、午後には演奏を聴いていただく。つまり、自分達が体験したものを、午後はプロの奏者の演奏として聴いていただき、こんなにも違いがあるのだなあということを感じてもらう。ちなみに、ここに写っているのは、安倍季昌先生で、宮内庁楽部の楽長をなさっていた方です。安倍家というのは、古くは安倍清明までさかのぼりますが、1300年の歴史が続く音楽の家のご当主であります。新聞での紹介もかなり多く千葉日報であるとか、朝日新聞の千葉版に紹介されています。これを見て、次の年も見える、リピーターという方も相当います。装束、雅楽を通じまして、参加する方が増えているということでございます。この二つのメインの行事がございますので、私どもでも、大学２年生から参加しまして、３年、４年で、３年はもう博物館実習生として、こちらの博物館にいくことになります。こうなりますと、大学の方からのアプローチでリソースを出すということになりますが、それだけでは足りない。そこで、一つの企画として出ましたのが、資料の２ページにあります企画展です。大学との共同企画展、共同開催というのはあると思いますが、大学が持っているものを博物館の企画展として、１ヶ月間、実際にやるということが、平成18年10月１日から31日まで「日本伝統文化展～和歌を歌う～」として実現いたしました。つまり、平成16年が装束、17年が雅楽、そして18年に企画展ということで行われたわけです。で、ここに趣意書がございまして、当時の村田館長のものですが、これを読みますと大学と博物館との共同ということのこの当時での認識あるいは意義というものが書かれています。少し長文ではありますが読ませていただきます。

「さて、今般、平成十八年第二回企画展といたしまして、「日本伝統文化展～和歌を歌う～」を、東京成徳大学との共催により開催することとなりました。当館と東京成徳大学とは、数年来、博学連携を旨としてさまざまの企画を共同で進めて参りました。平安装束体験講座・雅楽鑑賞体験講座・韓国装束体験講座などは皆様すでにお馴染みのことと存じます。その成果の上に立ち、初めて「企画展」という形で、大学の知的財産を皆様に公開できる運びとなったことは、慶びに堪えません。本企画展のテーマ「和歌を歌う」は、東京成徳大学、青柳隆志助教授の発案・企画になるものです。わが国の和歌は『万葉集』以来

一千余年の歴史を持ちますが、和歌は本来「歌」として、声に出して歌われるべきものであり、その伝統は「歌会始」として現在もなお受け継がれています。時あたかも皇室の慶事に当たり、宮中並びに民間に伝えられてきた「和歌を歌う」ことの諸相を紹介することは、非常に意義のあることと思われます。展示品といたしましては、室町時代の「大永二年綾小路資能和歌披講」をはじめ、各方面の協力により和歌の披講に関する諸資料が一堂に会するほか、「歌会」の現場が再現され、会期中には、市民公募歌をもとに、実際の「歌会」が行われます。さらに、宮中歌会始委員会参与の中島法城氏のご講演も予定されています。本企画展が、大学と博物館双方にとって、意味深いものとなりますよう、大方のご観覧をお願い申し上げる次第でございます。」

こういうあいさつ文でございます。まさしくこの認識が、大学と博物館の関係が一方的なものではなく、双方向であるということを示しています。双方に利益と申しますか、メリットと申しますか、それがないと良好な関係とは言えない。こちらが展示したい。では受けましょうというのではなく、企画展やりましょうか。では、こういったものが出せますよといった話から煮詰めていったことです。公的な機関によって認定されるということは、私学にとっては案外大事なことなのです。私立学校にとりましては、地方自治体の所属する機関との関連は常に意識して考えるべきことであります。公に認められることは非常に重要なことでして、色々なことを含めますと、こういったことには非常に意味があると考えられます。この企画展では、もちろん本学の実習生が陳列・解説を行いました。それから、「歌会」が行われました。また、もう一つ大きいのは、企画共同展ですので、共用移動展示ケースを用意しました。どこの博物館でも什器と申しますか、展示ケースなどを購入するのが大変なことで、それだったら大学の方で、予算化して展示ケースを買いましょう。で、共同で使用しましょうということになりました。ですから、今でも企画展をこちらでやる時には、本学の移動展示ケースが使われています。共同でということから、そういったアイデアも出てくる訳です。企画展を共同でやるということは、もし予算を使えるんであればそういった形でやりましょう。それを大学当局と交渉して、博物館に置きますからというようなことをしていくのも、アイデアの一つだなと思います。大学と博物館というのは、相容れない部分もあると思いますが、性質的に似ているところもあるわけです。一方では、対象が市民であり、学生です。形としては、お互い還元するということで、性質的に似てないことはない。そういたしますと、そのようなときに融通を利かせて、お互いに利用するという論理も成り立つのではないかと思います。これによって、学内でも展示施設をつくりたいという思いが芽生えてきまして、私は学芸員ではないので、そんなものつくったってという学内の反対は予想されますが、そこはもう押し切りまして、平成19年に「伝統文化資料室」という一室をつくることとなります。演習室の308教室というごく狭い部屋です。こちらに看板だけは立派ですが、一室を設けまして、展示兼装束の体験コーナーを設けました。大きくはありませんが、二つに分けて、奥の方は畳を敷いて装束を体験するという空間です。展示につきましては、博物館実習生が月替わりということで、一番最初は展示が年６回で、小企画展を実施しました。そして、継続して平成21、22年と行いましたが、手狭であること、308教室ということで３階ですので、見学者が入らないのです。やはり、１階にないとだめですので、何とか１階にといっておりましたら、就職の求人票を貼ってあるところで、求人票はもう古いから、そこは空けようということで、じゃあいただけませんかとわざわざ部屋に改装してもらいまして、新しく企画を出しましてこういったコーナーを設けることとなりました。寸法は42㎡であります。面積からは博物館類似施設にしかなりません。右側が装束体験コーナー、左が企画展示室で現在もこのように使用しております。で、これができまして、よりお客様が入るようになりまして、学生たちも喜んで、一生懸命展示等を工夫しております。このように基盤の部屋ができますと、さらに、欲が出てくるというのは変ですが、色々なことができるなということで、平成19年８月から八千代市立郷土博物館の博物館実習の一環として、本学内で半日の装束実習を行い、これは着せる方ではなく、実際に展示する、しまう、扱い方として半日の実習を行っております。これもこういう場所がないと中々できることではございません。毎年こちらの実習生さんは、本学に来ていただいて、装束実習を受けるということです。また、こちらで装束体験をずいぶんやるようになりましたので、出前講座といたしまして、小中高大学あるいは特別支援学校で装束体験もやっております。また、市川市には縄文体験フェスティバルとして、韓国装束の出前を毎年行っております。この写真は展示室で衣装体験コーナーで畳を敷いております。韓国装束を展示し、ここで着付等を行ってます。入り口はこのようになっています。ここは単なるスペースであった所に枠を取り付け、部屋にしている訳です。冷暖房は何とかなっていますが、１階ですので、

湿気がありまして、ダンゴムシがよくでます。それ以外は快適です。展示はケースを使いまして、大学が栗谷遺跡という遺跡の上に建っておりますので、八千代市教育委員会から大学から出土した土器、市内から出土したものを集めまして、栗谷遺跡展をおこなっています。中々好評でございました。さらに外へ、これは装束の着付けですが、希望者に対する体験でございます。本学は、装束につきましては十二単をはじめとして、平安朝装束といわれるものは一通りございます。いいところは、常時できるということ、それからもちろん無料であるということ。今日は各博物館の方がいらっしゃってますが、いつでも出張いたしますので、ぜひお声をかけていただければと思います。お好きな方は必ずいますので、１日10組位から対応できますので、宣伝しておきます。ちなみに本学の着付け装束班は京都で修行しておりますので、正しい着付けができます。何十人、何百人はできませんが、そういうことも可能でございます。案外、私どもはたいしたことないと思っていますが、非常に感謝されることが多いので、もしそういった企画がございましたら、お声をかけて下さい。

なぜそういったことをいうかというと、学生の勉強になるからです。これが双方向なんだと思います。いわゆる体験をしてもらうということもそうですが、いったらいっただけ学生が勉強になる。ですから、そのことが一番の目的になります。まとめに入りますが、本学は日本伝統文化学科というところなので、特質を生かそうということで、大学教育と博物館連携を考えています。もちろんのことながら、伝統文化は座学で学ぶようなものではなくて、実際にやらないといけないということで、お茶、お花、書道でも装束でもそうなのです。とにかく手を動かすということを重視しています。それで、教育の一環として「日本伝統文化マイスター」という制度を設けております。これは、華道、茶道、書道、装束、能・狂言、三味線・箏、雅楽、和歌披講の８分野がありまして、これを全て履修して単位を取った学生には、マイスターという称号を与えるものです。もちろん本学のみの称号ではありますが、これだけのものを身につけている学生はそうそういるものではありません。どこにいっても通用する。平成22年に設けたものですが、現在まで12名がマイスターとなっております。それから、先ほどもいったように、人と人との関係から始まったことではありますが、こちらの博物館は本学のホーム博物館といえると勝手に考えておりますが、ホームがあるということは大変に心強いことでありまして、博物館の方から何かこんなことはできないかということがあれば、すぐに対応できるということでございます。双方向性というものが非常に強いところです。さきほどもいったように、私学と公的博物館が、近くなり過ぎるのはどうかという意見が学内から出ることもあります。それよりも、市民の方と学生に利益があれば、それは超えるべきことだと思います。公の立場はあると思いますが、そういったことは折り込み済みと言うようにしています。で、幸せだったと思うのは、日本伝統文化学科という学科はそういう意味で、伝統文化に直接触れる・体験するということで、たとえば歴史系博物館でやっていることとほとんど同じなのです。ということは、博物館のことを学ぶと、自然に伝統文化も学べるということで、博物館学芸員の資格を取ろうと思うと、資格を取ることを通じて学べてしまうということがあります。つまり、目的がほぼ一致している訳です。そういう意味においては、本学の学科の性格が合っていたと言うことです。そして、佐藤氏をはじめといたしまして、この八千代の博物館が非常に理解をしてくださって、相互に提案をできる関係になったということも幸運でした。連携が深まれば深まるほど学科としての教育効果も高まります。これは用意されたものではないけれども、結果としてはそうである。であれば、博物館課程を持っている大学は、ほかにも色々な、たとえば獣医学科であったり、それぞれの特徴があって、それを生かせるのだろうと思います。そういったことを探していくのが、この博物館と大学とを考えた場合のメリットになるのではないかと思います。時間となりましたので、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

報告２　大学博物館活動と地域連携－和洋女子大学の活動から－

和洋女子大学言語・文学系教授　駒見　和夫

和洋女子大学の駒見と申します。私のテーマは「大学博物館活動と地域連携」ということで、和洋女子大学文化資料館での活動をもとにお話をさせていただきます。簡単なレジュメを１枚用意しましたので、参考にしていただきたいと思います。

始めに和洋女子大学の位置を知ってもらいたいと思います。市川市の国府台という場所にありまして、すぐ西を江戸川が流れており、この江戸川を渡れば東京都の江戸川区から葛飾区になります。つまり市川市の西端で千葉県の端でもあって、また国府台の北は松戸市に接しており、行政区域が入り組んだ場所になるのです。大学博物館も地域の方に来ていただかないと活動は成立しません。その意味において大学博物館も地域博物館であります。和洋女子大学文化資料館は市川市に所在しますが、今述べた地域環境のもとで機能していくためには、行政域を越えて活動をしなければなりません。当館は私立の大学博物館という立場から、行政区域にとらわれずに博物館活動をおこなっています。

和洋女子大学文化資料館は歴史系の博物館で、収蔵資料は埋蔵文化財が中心で、和洋女子大学のキャンパスがある国府台は古代下総国の国府が置かれた場所で、キャンパス内の再開発の時に発掘調査がおこなわれまして、下総国府にかかわる多数の遺構と遺物が出土しております。また隣接する国分台と呼ばれる台地上に併設の中学校がありまして、ここも造成時に発掘調査が実施されて下総国分尼寺の寺院地にあたることがわかり、たくさんの遺物も見つかっています。ですから両方とも貴重な遺跡で、そこから出土した考古資料を当館では展示しています。また、和洋女子大学は裁縫の学校から始まっているので服飾関係の資料も多く収蔵しております。ちなみに当館は大学の建物の17階にあって、この建物は台地の上に立っているので高層階からの展望がとても良いのです。そこで高層からの景観も展示物の１つと位置づけて、西側の東京方面を眺望できる展示室も設けています。

それでは本題に入ります。本日の与えられた主題は「博物館・美術館が地域にできること－共働・共生を目指して－」ということで、博物館と大学あるいは企業との連携の方向性をテーマとするということですが、和洋女子大学文化資料館は大学附属の博物館ですから、各種の博物

館の中でも大学に一番近い関係にあって、大学と密着した博物館としての活動を報告しようと思います。文化資料館では学生を取り込んだ活動に取り組んでおりますが、博物館と大学が連携していく上で、大学が持っている一番の財産は学生だと考えています。博物館と大学の連携を考える場合、例えば研究の連携だとか、あるいは学芸員と大学の研究者との連携も大切でしょうが、学生と博物館が結びつくことでも良い連携ができるのではないかと思うのです。

そこで文化資料館の３つの活動から、「提言」という大袈裟なものではありませんが、何かアイディアとなることをお示しできればと思っています。

１　出前講座による博学連携の取り組み

文化資料館では学校との連携を大事に考えています。こちらの八千代市立郷土資料館でも大変熱心に博学連携の活動をされているようですが、当館でも小・中・高等学校との連携について、出前講座を中心に積極的におこなっています。当館の場合、みなさんの博物館と少し違うのは、和洋女子大学の学生をこの出前講座に参加させている点です。「参加させて」というよりは「希望者を募って」が正確なのですが、大学生とともに文化資料館の資料を持って各学校に出かけて行きます。参加する学生はこれまで学芸員課程の履修者に限定しておこなっていますが、最後にもお話しますように、学芸員課程の履修学生に限らなくてもいいんじゃないかと現在は思っています。取り組み方次第では、多くの学生を活動に参画させることができるだろうと考えています。

文化資料館が実施している出前講座での学習の目的

は、いつの場合も大きく２つを掲げています。講座では館の収蔵資料のうち、主にキャンパス内遺跡から出土した実物の土器などの考古資料を教材にしていて、土器をただ見せて説明するだけではなくて、せっかく資料を持参するのだから子どもたちに触って体験してもらうことをおこなっています。この資料の触察を通して、古代の生活や地域の歴史を体験的に学ぶことを目的の１つとしているのです。国府台の周辺地域の学校であれば、国府台地域の古代の歴史をテーマに出土した実物の資料に触ってもらい、そこから地域の歴史を少しでも身近なものに捉えてもらうことがねらいとなります。そして、このような実物資料で地域の歴史を学ぶことができるのは地域にとってすごく有益なことで、そのための博物館は有意義で実はとても楽しい場所だということに気づき、博物館の活用方法を知ってもらうことが２つ目の目的です。要は博物館リテラシーの入口の部分を作るということです。大きくはこの２つの目的を掲げて出前講座を実施しています。

出前講座を実施する際には必ず指導計画を作って、学校の先生と事前に２度くらいの打ち合わせの機会を持って、学校からの要望などを聞きながら実施内容をまとめていきます。この出前講座では、先程も申し上げましたが、大学生が参加することが大きな特徴でありまして、土器の触察の際に学生が子どもたちの中に入って、コミュニケーションを交わしながら触察することに重点を置いています。これが学生の主な活動となりますが、その他にも講座の終わり近くで学習内容を振り返るクイズをおこなっていて、そこでも学生が参加して子どもたちが学んだことを確認していきます。このように学生が講座の大事な部分を担って進めています。

いくつか写真をお見せします。最初は体育館を会場にした出前講座の場面で、最初に学生も一緒に並んで挨拶して始まり、主要な内容は学芸員がパワーポイントで説明を進めていきます。触察体験はグループになってもらい、学生がそれぞれ５人から10人くらいの子どもたちを担当します。触察の時にはちょっと触るだけでなく、よく触ってもらって匂いも嗅いでもらい、できるだけ子どもたちとコニュニケーションを交わすようにしながら進めていきます。また事前に用意したワークシートに、資料のスケッチや触察の感想なども書きながら観察と触察をしていきます。このワークシート作りでも学生が協力していて、学生のアイディアを取り入れたものになっています。次は別の学校での講座の写真で、土偶の触察の場面です。触察する前に「両手で優しく持ってください」とか「振り回したり高く上げたりすると危ないから止めてね」という注意点を学生が話しています。次の場面は学生と子どもたちが頭を突き合わせながら観察しているところですね。

次の写真は近隣の国府台小学校の６年生に実施した様子です。ここの６年生は３クラスあって、学校側の要望はこの３クラスを同時に実施したいというものでした。多くの場合、出前講座を実施する時には学校側は統一的なカリキュラムとして繋げていく点から、１クラスだけではなくて、最低でも学年単位でおこないたいという希望が出されます。皆さん方の館でもいろいろと工夫されておられるのだと思いますけど、複数クラスで大勢の人数になると、博物館から１人だけで行って対応するのはなかなか難しいですね。大学博物館である文化資料館の出前講座のメリットは、学生が一緒に行ってチームティーチングでの取り組みができるということです。この国府台小学校での講座は、３クラスの約110名を対象に最初はパワーポイントで全体に講話をおこなって、その後５つのグループにわかれ写真のように車座になって床に座り、そこに学生が土器を持って入り触察を進めていくスタイルで実施しました。学生は児童とのコミュニケーションに努めるようにして、「この土器は何に使っていたと思う?」とか「土器はどんな手触りがする?」という話題を投げかけながら進めています。次の写真は別の中学校の例で、この場合は会場が教室だったので机を合わせてグループを作り触察をしています。次もまた別の中学校の例になりますが、観察しながらワークシートを記入しているところです。

次の写真は、東京都の葛飾特別支援学校で知的障害の高校２年生を対象にした講座の様子です。先程も申し上げましたように、文化資料館は行政区域を越えて活動していて、この学校からの要請があって実施しています。昨年より２年継続していて、今年は中度と重度障害のある生徒たちを対象におこないました。知的障害のある子どもを対象にする場合、個々への対応が必要になります。ですから、私だけが１人で行って講座を進めようとするのはとても無理です。学生が一緒に行ってチームティーチングで対応するから、特別支援学校でも観察や触察の学習が可能になるわけです。学生とチームになって賑やかに進めると、学校の先生方もたくさん入ってきてくれて、このようにスムーズにできました。この講座では触察だけではなく、土器の接合の模擬体験として現代の割れた茶碗の接合作業をおこないました。

次に写真で示したのは学生が工夫して作ったワークシートで、特別支援学校で使用した中度と重度の知的障

害がある生徒用のものです。事前に先生と協議をした時に、中・重度障害の生徒はワークシートに所見や感想を書くのが難しいということを教えてもらいました。そこでどんなことなら可能か先生に相談したところ、解答をイラストにしたものから選ぶことならできるということでした。そこで「この土器はどうのようにして使ったのかな?」と問い、その答えを解答シートの４つのイラストから選んで切り、ワークシートに貼るかたちにしました。これらのイラストも学生が書いてくれたもので、講座の事前準備の段階から学生が協力する体制をとっています。

次は和洋女子大学の併設中学校での写真で、学生がお揃いのトレーナーを着て活動している様子です。昨年まで学生はそれぞれの私服で講座に参加していましたが、子どもたちに出前講座を特別な学習の場だという期待感を高めるために、ユニフォームのようなものを着用してはどうかという指摘を学校の先生から受けました。例えば、みんなが白衣を着て並ぶと特別なプログラムだという気持ちがして、子どもたちの気持ちが盛り上がるだろうというわけです。でも白衣は裾が邪魔になってしまうのでトレーナーを作りました。トレーナーの背中の部分には学生がデザインした文化資料館のキャラクターがプリントしてあり、こうしてお揃いのトレーナーを着てチームティーチングの講座を進めると、確かに雰囲気が盛り上がるような感じがしています。

このような出前講座の際には、講座評価の目的で事前と事後にアンケート調査をおこなっています。ここに表示したグラフは和洋国府台女子中学校の２年生に実施した調査結果です。事前のアンケートでの「身近な地域の歴史を勉強するために博物館を利用したいと思いますか?」という質問に対して、「思う」と「思わない」がそれぞれ半数くらいに分かれていました。ところが事後のアンケートでの「地域の歴史を学習するため博物館に行きたいと思いましたか?」の問いに対しては、「とても思った」「思った」「少し思った」という肯定的な回答は合わせて８割以上となっています。この結果から、目的の１つに掲げている博物館利用の動機づけについて効果が出ているものと思います。どの出前講座であってもおおむね同じような結果が示されています。

そして「講座ではどのような点が良かったですか?」という事後の質問に対しては、複数選択の回答ですが一番多いのは「実物観察の時の大学生のサポート」です。学生が参加したチームティーチングの方法がもっとも評価されているわけで、三番目に多い「講座での大学生との会話」も学生とのチームティーチングに関連した評価だと思われます。大学生とのコミュニケーションを通じて資料の事を学んでいく、そうしたスタイルが有効なのだということが認識できます。また、二番目に多い「歴史クイズの実施」も学生が質問して子どもたちに答えを聞くスタイルで、活動の中心は学生なのです。したがって、大学生が参加する出前講座の方法が高く評価されていることがわかります。私がパワーポイントで一生懸命解説する部分は、残念ながらあまり高く評価されていません。そのような結果がアンケートに示されています。

つまり、大学生が参加する出前講座の実施は、学芸員と学生のチームティーチングの体制を作ることが可能になって、その結果、講座を進める学芸員や学生と受講者との間にコミュニケーションの機会を創出することができることになります。そのことが、児童生徒の学習効果を高める上で顕著な効果をもたらすようです。

２　出前講座プログラムと大学生の社会実践教育

大学生が参加する出前講座が児童生徒にどのような効果があったかという視点でこれまで述べてきましたが、一方の大学生にとってはどんな意義があるかについてお話しします。

大学生に対しては、出前講座プログラムによる社会実践教育という位置づけで実施しております。大学生をただ連れて行くのではなくて、参加する学生に計画的な教育プログラムを設定して、その上で博物館の出前講座に参加してもらうことを２年前からおこなっています。具体的には合計３時間程度の２回の事前研修と、事後研修も２回実施しています。事前研修は２～３週間前と直前に設定していて、研修内容は学習テーマとねらい、具体的な学習内容と活動、指導上の留意点について相互理解を図っていきます。その際には学生から意見やアイディアを出してもらいながら講座内容の検討と準備を進めます。さらにこれと並行して、学生には自主研修と研究を課しています。講座で扱う資料についての自主学習です。資料に関する知識が多いほど子どもたちとのコミュニケーションが活発になることを学生に伝え、積極的な自主研究を促すようにしています。中には、自分自身でオリジナルな教材を作って子どもたちへの説明や会話で用いる意欲的な学生もみられます。このような事前研修を経て出前講座に参加することとなるのです。

講座では先程からお話ししているように、触察体験のワークショップと博物館の活用方法の説明などを学生が

担当します。学生には児童生徒とのコミュニケーションを積極的におこなうことを強く求めています。

そして出前講座が終わると、なるべく早い段階で省察と自己評価を１時間程度の時間でおこないます。参加者全員で意見や感想を述べ合った後に、各自の活動をチェックシートで評価してもらいます。さらに後日になりますが、出前講座での実践活動を学芸員課程の授業の中で報告する時間を設けています。参加者の学習成果を他の学生にも広げることを意図したものです。この写真は報告会での学生のプレゼンテーションの様子で、活動内容や子どもたちの反応などを他の学生に説明しているところです。

評価のチェックシートでは、「学芸員資格取得を目指す上で出前講座実施プログラムへの参加はどのような意義がありましたか?」という質問を設けています。これに対する学生の記述をまとめると、おおよそ５つの意義が示されています。博物館に対する理解が深まった、学芸員に対する理解が深まった、学芸員に必要な能力や技術が会得できた、講義で学んだことの実践化ができた、学芸員資格取得への意欲が向上した、という内容に集約されます。最初にお話ししたように、出前講座への参加は学芸員課程の学生を対象にしているので、これをきっかけに学芸員職への意欲向上につなげることも強く意図しているのですが、そういう点に意義を感じたとする意見はとても少ないんです。出前講座に参加した学生の満足度は非常に高いのですが、どの部分で高いのかと言うと、学芸員になるという気持ちが強くなったというのではなく、例えば学習支援活動を実践して貢献できたこととか、あるいは子どもたちとのコミュニケーションの方法や資料の解説を実際に体験できた点などに高い満足を感じているようです。だから何も学芸員になるとかではなくて、社会実践の場として大変良い経験が得られたと捉える評価なのです。

このように、計画的な教育プログラムによって実践した博物館出前講座は、学生にとって充実度や満足度が高い学習プログラムとして評価してくれています。その評価は学芸員職に対する学習成果にとどまるものではなくて、それ以上に幅広い社会貢献や実践的学習の有益な機会となる点に意義を感じていることが、学生の自己評価から捉えることができます。

3　教育委員会と連携した社会貢献

もう１つ、教育委員会と連携した社会貢献についてお話しします。文化資料館では、公立の歴史系地域博物館が設置されていない基礎自治体での博物館出前講座に昨年から取り組んでいます。このような自治体では地域の文化財が学習資源として有効に機能しておらず、また博物館環境が整った自治体と比較して博物館の利用意欲が低いのではないかと考えています。

そこで、このような基礎自治体である茨城県猿島郡の五霞町で出前講座をおこないました。五霞町は小規模な自治体で博物館が無く、公民館の中に小さな郷土資料室が設けられていて、考古資料や民俗資料が展示されています。五霞町には冬木貝塚という学術的にすばらしい縄文貝塚があって、そこから出土した遺物が郷土資料室の中心的な展示になっていますが、学芸員がいるわけではなく、通常は部屋に鍵がかけられていてほとんど利用されていません。そこで、この郷土資料室の資料を使って出前講座を実践することによって、地域の文化財の有効活用になるのではないかと考え、五霞町の教育委員会の了承と協力を得ておこなうことができました。五霞町には小学校が２校と中学校が１校あって、すべての学校で実施しました。写真はその様子です。

五霞町での講座のアンケート結果を、以前に実施した市川市の国府台小学校６年生でのアンケート結果とグラフに表して比較してみました。国府台小学校は近隣に市川市立の歴史系博物館がある学校で、ここでの事前アンケートでは「自分が住む地域の歴史に興味がありますか?」に対して、「とても興味がある」と「興味がある」と答えた児童が53％でした。これが事後に「地域の歴史に興味が持てましたか?」と問うと、「とても興味が持てた」と「興味を持てた」で80％に数値が大きく上っています。また、「地域の歴史学習で博物館を利用したいと思いますか?」との問いには、事前のアンケートでは「思う」と「少し思う」の合計は約７割ですが、講座後には８割以上に増えているのです。

一方、五霞町での出前講座は小学校５・６年生と中学校１・２年生の257名を対象に実施して、国府台小学校と同様の質問をおこないました。「自分が住む地域の歴史に興味がありますか?」に対して、「とても興味がある」の回答が約４％ですごく少ないんですね。「興味がある」を合わせても30％程度でしかありません。つまり、公立の歴史系博物館が無い自治体の子どもたちは、自分の住む地域の歴史に興味が持ちにくいんじゃないかと観察されるのです。そして事後の「地域の歴史に興味が持てましたか?」の質問には、国府台小学校と同じように「とても興味が持てた」と「興味を持てた」で80％以上を占めるようになっています。

また、「地域の歴史学習で博物館を利用したいと思いますか?」には事前の回答で67％が利用したいと答えていて、かなり高い要求が認められるのです。事後の回答ではこれも73％にわずかですが増えていて、この結果からすると博物館を利用したいという意識はかなり高いことがわかります。

このように市川市の国府台小学校と五霞町の小・中学校の両者を比較してみますと、「自分が住む地域の歴史に興味がありますか?」に対しては、「とても興味がある」「興味がある」と回答した割合は国府台小学校では53％ですが、五霞町の小・中学校は33％でしかありません。この数値に表れた差が、基礎自治体に公立の歴史博物館が有るか無いかの違いなのではないかと思います。また、「地域の歴史学習で博物館を利用したいと思いますか?」との問いに、国府台小学校は「思う」「少し思う」で60％あり、五霞町の小・中学校は67％で国府台小学校を上回る意欲があるわけです。つまり五霞町のような公立の歴史系博物館が無い地域に出向いて出前講座をおこなうことで、意欲のある子どもたちを行政域を越えて博物館に呼び込めるのではないかと思うのです。

公立の歴史系地域博物館が設置されていない基礎自治体での博物館出前講座は、博物館活動の視点で地域の文化財を学習資源に位置づけることによって、その認知度が高まることになるはずです。同時に児童生徒の博物館リテラシーの育成支援に取り組むことで、自治体の枠を超えて周辺地域の博物館利用率の向上につなげることができるのではないでしょうか。五霞町のすぐ隣には千葉県立の関宿城博物館がありますが、五霞町の教育委員会と連携して県域を超えた出前講座ができれば、意欲のある子どもたちの博物館利用を強く促せるのではないかと思うのです。

4　博物館の学習支援活動と大学生の社会実践学習の結合

まとめに入りますが、博物館の学習支援活動と大学生の社会実践学習とを結びつけることが可能で、それが博物館と大学との連携の１つのスタイルになり得るのではないかと思っています。博物館活動に興味関心が高い大学生をアウトリーチ活動などの参画者として位置づけていくのです。現在の大学では学生の社会実践に重点を置いています。学生が実践した地域でのボランティア活動や社会貢献活動などを履修単位として認める制度を、千葉県でも多くの大学が設けるようになっていて、大学ではそのための活動先を探している現状があります。また単位認定とは関係がなくても、学生には何らかの社会実践に参加したいというニーズが極めて高いように思われるのです。和洋女子大学にも大学公認のボランティア組織がありますが、そこには全学生のうち約５％が登録しています。社会への何らかの貢献活動をしたいという学生のニーズも高いのです。

ですから、ある程度博物館に関する知識のある学生が望ましいでしょうが、知識のない学生でも博物館側が先程示したような事前の研修プログラムなどを組んで実施することによって、大学生の参加を得て博物館の出前講座に取り組むことが可能になるのではないかと思います。また、大学生を加えてチームティーチングができるようになれば、各博物館の活動の幅が今以上に広がると思うのです。そして大学生を博物館でのアウトリーチ活動の参画者に位置づけることで、博物館における学習支援活動と大学における学生教育を有意義に結びつけるシステムとなる可能性があるのではないでしょうか。さらに両者の相互連携の推進は、生涯学習社会に位置づく博物館にとって、生涯学習がさまざまな世代に対して多様な学習の機会を提供するという視点から見ていけば、博物館の生涯学習機能を大きく広げていくことに結びつくはずだと思うのです。

これが私からの提言というか、アイディアとしてお示しするものです。ご清聴ありがとうございました。

報告３　企業博物館と地域連携の課題

米屋株式会社（成田羊羹資料館）調査役　　宮内　　智

弊社は明治32年創業で、成田山参道で参拝者向けに栗羊羹を製造して販売したのが始まりです。明治30年に本所から成田まで鉄道が開通し、それまで成田街道を歩いて来ていた参拝者が日帰り出来るようになり、成田山の参拝者が大幅に増えました。創業者の諸岡長蔵がせっかく成田山に来ていただいた方にお持ち帰りいただく、何かよいお土産はないかと考えまして、現在はありませんが、新勝寺の精進料理栗羹からヒントを得まして、栗羊羹を考案、販売したのが始まりです。今年で創業114年を迎えました。現在では、羊羹･ドラ焼き・焼き菓子・生菓子など和菓子全般を扱っております。成田山の表参道の本店を中心に千葉県北西部に直営店15店舗、テナント店13店舗を展開している企業でございます。

それでは、成田羊羹資料館の説明をさせていただきます。資料館は成田山参道のなごみの米屋總本店の敷地内にあります。創業の精神、成田山参拝記念としての羊羹の歴史・作り方などを展示することにより、成田名物としての羊羹を紹介することを目的に平成14年10月、總本店の改築に合わせて設立されました。今年で開館11年目になります。延床面積238.48㎡(約72坪)、２階建てで、１階・２階とも30人のお客さんが入るといっぱいになってしまうような小さな資料館でございます。来館者は平常月1,000人前後、正月期は4,000人以上あります。資料館目当てで来ていただいている方と總本店でのお買い物のついでに寄っていただいた方が主な来館者です。来館者数の面では非常に恵まれております。展示内容ですが、１階では４月～９月と10月～翌年３月までの年２回企画展を開館以来開催しております。２階は常設展示で、羊羹の歴史・羊羹のパッケージ・看板類・手紙・道具類など300点程を展示しております。開館時間は10時～16時。休館は展示替えの時のみです。入館料無料です。

資料館の取り組みとして、成田名物である羊羹に愛着を持ってもらうために、弊社のみならず、全国各地の羊羹の展示と羊羹のルーツ・変遷を展示しています。また、企画展においては、成田をテーマとした展示も行っております。お手元の資料の方に企画展の一覧がありますが、第８回「成田山参道のおみやげ展」。これ

は成田山参道の発展とお土産の歴史を取り上げました。第９回では「成田山開基1000年祭を振り返って」。成田山開基1070年に合わせて、昭和13年に行われた開基1000年祭の様子を展示したものです。第15回「成田ゆかりの人物展」。成田ゆかりある市川團十郎・二宮尊徳・木内惣五郎などを取り上げました。第16回「成田街道と成田山参詣の旅」。成田街道の昔の様子と現在まで残っている建物や石碑などの写真を展示しました。第20回は「成田の風景　いま・むかし展」。これら企画展は、成田により親しんでもらうために開催しました。

本来ですと、企業資料館ということで米屋羊羹資料館と名称になるのでしょうが、成田と羊羹に愛着を持ってもらうことを考えて、あえて「成田羊羹資料館」という名称にいたしました。

団体見学者への対応ですが、資料館・總本店・敷地内にあります旧跡庭園をご案内しています。30分位のコースで、町内会や老人クラブといった方々が中心です。年に20～30団体が来館します。ご希望があれば個人の展示案内も行っております。それから、中・高校生の見学があります。成田市内の中学校では、成田山参道の自由研究を行っており、参道のお店に行って取材などをするのですが、資料館にも多く来られます。またお店では販売の体験学習を行っています。中学生の中には羊羹を食べたことがないという人もおります。

次に地域に密着した施設ということで、總本店内には「成田生涯市民ギャラリー（愛称：ギャラリーなごみ)」を設置し、市民の方々を中心に貸出を行っております。これらも資料館が管理しております。週替わりで成田近隣のサークル活動の場として、書道・陶芸・

絵画・押花の展示が行われています。成田にはギャラリーのような施設が少ないので、このギャラリーは3年先まで予約で埋まっております。

總本店2階で、毎週水曜日午前・午後2回、各定員15名で、お菓子教室を開催し、和菓子作りの体験して頂いています。応募者が多数あり、抽選を行うほどの人気です。

お不動様旧跡庭園と庭園が敷地内にあります。永禄の昔に、故あって成田山のお不動様がご遷座された場所です。平成4年に整備いたしまして、毎年4月には野立てお茶会が庭園で開催されております。期間中2,000人前後の方々が訪れています。

資料館の課題をお話ししますと、現在2名で館の運営をしております。私が企画展の実施、展示物の作成、館内のご案内、広報関係をこなしています。小さい資料館ですから、リピーターを増やすために年2回の企画展の充実を図ることが最大の課題です。企画展の充実を図るためには、成田市や他の博物館との相互協力が必要だとは感じております。現在までの成田市との関わりと言えば、三里塚御料牧場記念館の館内撮影、成田市発行の書籍の複写など、資料の複写や撮影の許可を市にお願いしていることです。企画段階ではありますが、平成26年、成田市が市制60周年を迎えることから、資料館でも成田市制60周年をテーマに企画展を開催したいと考えているところです。何ができるかを成田市と話し合いながら進めていきたいと考えています。また、他の博物館との関わりですが、静岡県に「石の博物館」がありまして、館長さんが紙を集めるのが趣味で、羊羹ペーパーも多く集められておられます。明治末から昭和50年までの羊羹の包み紙・ラベルの写真集を出されてます。収集した資料のうち200点近い資料を複写させていただき、企画展を開催したことがあります。東日本鉄道文化財団鉄道歴史展示室の企画展に資料の貸出を行ったことがあります。他には国立歴史民俗博物館に資料をお借りしたり、成田山霊光館とは資料を借りたり、資料の内容の問い合わせを行ったことがあります。現状は以上のとおりです。

先程もお話いたしましたが、当館としては企画展の充実が必要ですが、20回を数えますと、新しいテーマ探しや資料探しに苦労している状況です。これからも成田市や他の博物館と交流を深めていきたいと思っております。

以上で報告を終わります。

質　疑　・　討　論

コメンテーター　千葉経済大学経済学部教授　菅根　幸裕
千葉県立現代産業科学館普及課長　森田　利仁
パネラー　青柳　隆志・駒見　和夫・宮内　智
司　会　尾﨑　晃

会場風景

司会：お三方にご報告いただきました。ありがとうございました。それでは質疑・討議に移らせていただきたいと思います。コメンテーターを紹介いたします。最初に菅根幸裕さんをご紹介いたします。菅根さんは千葉経済大学経済学部教授でいらっしゃいまして、博物館学、日本民俗学でご教鞭をとられております。また、千葉経済大学地域経済博物館を設置され、学内外において活動されておりまります。菅根さんは、千葉県総南博物館に長くお勤めになられ、大学で博物館学を教えられており、大学と博物館の両方を熟知されていると思いまして、本日お呼びいたしました。

菅根さん、よろしくお願いいたします。

菅根：ご紹介いただきました菅根と申します。青柳さん、駒見さんのご報告は同じ大学教員と大変勉強になりました。私、大学の教員といたしまして、大学博物館は大学の広報に非常に役だっています。大学では入学生の確保が問題となっています。皆さんの博物館で問題になっているのは入館者の確保だと思います。そういった究極の問題に対し、大学と博物館がいかに、利益と申しますか、協働していくことができるか。地域の学校や博物館との協働は大学にとっては非常に大きな広報活動となります。ただし、千葉県の大学の教員の実情を言いますと、千葉県の大学教員の多くは千葉のことをよくは知りません。実は東京在住の方が多いのです。学生は千葉県在住者が多く、千葉のことが好きで、千葉から離れたくない、就職したいと思っている学生が多くいます。千葉に就職先がなくて困る場合もあるのです。博物館の方が大学教員などに千葉の良さを教えるということは、地域に根差した博物館を運営されている皆様にしか出来ないことですので、そういったことをお願い出来ないか、と思っています。

また、お互いにどういったものを持っているか。大学には研究という機能があるのですが、発表する場があまりない。博物館は展示という形で研究成果を発表する場を持っています。しかしながら、大学のプログラムの中に博物館を入れるのは難しい現状です。なんとかしたい面もございますが、博物館の方から大学に来て、教員や学生に千葉のこと教え込んでいただきたい。博物館の側からのアウトリーチを願っておる次第でございます。

司会：ありがとうございました。菅根さん、森田さんお二人のコメンテーターには、これからご議論に加わっていただきまして、随時ご意見をいただきたいと思っております。

それでは、もう一方、森田さんのご紹介を致します。

森田さんは、千葉県立現代産業科学館の普及課長をなさっておられます。現代産業科学館は県内でも随一の企業との強い連携を行っている博物館です。館の活動をバックアップする展示運営協力会という企業が集まった組織があります。私も昨年度、スタッフの一員としておりましたが、とても熱心に活動されている組織です。展示運営協力会の他にも地元企業を紹介する展示活動など、企業との連携に積極的な博物館です。

挨拶する堀田千葉県立中央博物館長

館の展示資料は現代の科学や産業に関わるものですが、森田さんは博物館界全体を見渡しての様々なご提言をされている方ということもあり、本日お呼びいたしました。森田さんよろしくお願いします。

森田：現代産業科学館に来て、やっと９カ月経ったばかりですので、現代産業科学館については、司会をされている尾﨑さんの方がお詳しいと思います。

こういった場でお話する時に、連携という言葉について意見を言うことがあります。日本の博物館において、他館や外部との連携が盛んに言われるようになったのは、バブル経済が崩壊し、自治体の財政が悪化してきて、新たに建物を造ったり、人を雇ったり、資料を購入したり出来なくなってきたという背景があり、直接的なきっかけとしては、おそらく平成10年に生涯学習審議会が「社会の変化に対応した今後の社会教育行政の在り方について」という答申を出した、その中で今日の博物館行政の在り方が決まってしまったのです。例えば、文部科学省が出している「博物館の設置及び運営に関する望ましい基準」の中で、以前は博物館では何名以上の学芸員がいることが望ましいと具体的な数字が書かれていましたが、答申が出て以降、学芸員の数に関する項目が無くなってしまいました。文部科学省では、これを博物館行政の大綱化と弾力化と述べているのですが、どういうことか言うと、勝手にやって下さいよ、ということに近いんです。弾力化は、今まで厳しい基準でやってきたけど、博物館の自主性に任せますよ、ということです。大綱化は、それまでに博物館法からもれていた小さな博物館も博物館として認めますが、行政は具体的ところにはあまり関わらないよ、という姿勢、腰を引いてしまったのが大綱化の本音ではないか、と思います。そういった時に博物館界では一番大きな団体である日本博物館協会が文部科学省から委託を受けて、「対話と連携」という調査研究報告書を出しました。

その中で「連携」という言葉がクローズアップされて、博物館協会のあらゆるところで連携という言葉が語られるようになってきました。「対話と連携」を改めて読み直してみると、博物館が持っているヒト・モノを相互に活用していきましょう、それが今後の博物館の飛躍の鍵になりますよ、というのがここに出てくる「連携」です。ところが、平成13年以降約10年間、様々な博物館の方と接する機会があって感じていることなのですが、それぞれの館が持っている個性的なヒト・モノを相互に活用していき、長続きしている例は非常に少ないのではないか、と感じます。ただ、少ない中でも成功例がありまして、それは小さい館同士の連携という場合が多くあるような気がします。大きい館・大きい組織同士の連携は短期的には成功しますが、長続きせず、時には形骸化してしまう例が多いような気がします。

それがなぜか、と考えることがありまして、これは私の考えなのですが、連携を失敗に基づく方程式があります。一つは国の外交と同じです。例えばAという国とBという国がそれぞれ別々の資源を持っているとします。じゃあ、国のトップ同士がお互いの資源を利用しあえば、お互い幸せになれるのではないかと、外交交渉をして、そうすることになったとします。しかし、資源にはそれぞれ価値がありますから、自分の国が持っている資源が世界的には高値で売れるのに、なんであの国にだけ協力しなければならないのか、また反対に、あの国の資源を貰うより、別の国の資源を貰った方が良いし、安くなるのではないか、という国内世論が必ず出てきます。

冒頭に、司会の尾﨑さんが対等な関係を作らなければならないとおっしゃいましたが、短期的には対等な関係はあり得ないのではないか、と私は思っています。短期的には必ずどちらかが得をし、どちらかが損をします。それは国と国とも、館と館とも同じであると思います。ですから、連携は長期的にやっていく必要があります。長期的にやってこそ、始めて50対50の関係が構築出来ます。損得が相殺される。ところが長期的関係を継続させるためには、短期的に内部の反対意見を説得しなければなりません。それは大きな館・組織になれば組織内世論が必ず出てきます。そういった時に長期的には得をするから、長期的にやることが大切だということを、しっかり説明をし、納得してもらい、組織を一つの方向へ持って行くという強い意志がないと、いつの間にか、引き継いだから行うけど、なし崩し的にやめてしまおうという意見が必ず出てきて、連携が形骸化してしまいます。そういったことが、大きな館・組織では連携を成功に導けない理由でないか、と思っています。

他にも様々な理由はあるとは思いますが。本日のテーマ、大学・企業と博物館の連携はとてもこれから先、色々な展開が出来て面白そうだと思ったのですが、平成13年以降、行ってきた様々な連携の標本を我々が

コメンテーター

パネラー

身につけていない以上、短期的なお祭り騒ぎに終わってしまうのではないか、と私は心配しています。

あるいは学芸員と教員、学芸員同士の個人的な繋がりがあるうちは成功するが、無くなれば形骸化するという同じような失敗を繰り返してしまいます。これは否定的な意見ではなくて、そういった反省を踏まえて、しっかりやっていかなければいけないのかな、と思っています。

司会：ありがとうございました。お二人からコメントを頂きましたので、報告を頂いたお三方からご意見を頂きたいのですが、青柳さんいかがですか。

青柳：菅根さんのお話から、大学のPRのためでの大学博物館は必要だと感じます。人文系大学は現在非常に厳しい状態です。私、現在学生部長という職ですが、来年から入試広報部長でございます。入試広報部長は大学をアピールするのが仕事ですので、リソースだけなく、PRの手段として博物館も当然あり得ることだと思います。私も大学博物館を構想していきたいと決意を新たにした次第です。

それから、森田さんのお話でございます。人的な交流から始まった連携は、人的交流が絶えた場合に衰微しやすい、それはそうだと思います。当然そうだと思うからこそなるべくそうならないように親密なうちに、この人がいなくなった場合でもしっかり連携が続けられるよう配慮しているつもりでおります。そうでなければ、せっかく築いた関係が何のために築いたのかよくわからなくなります。つまり、友達関係で繋がっている関係であってはならないと、常に思っております。

幸いにも八千代市郷土博物館の皆さんは温かい目で見ていただいておりますので、引き続き、事業を一緒にさせていただいております。必要ないと言われれば致し方ないですが、様々な提言をしつつ、連携させていただいております。そういったことを肝に銘じた上で連携していかなければならないと感じました。

駒見：コメントが難しいですが、森田さんのお話をお聞きしてそうだなあと思う面が多いです。博物館が地域と連携するというのは生涯学習社会への対応なのだろうと思います。自分達だけで出来ることは限られているだろうし、様々な資源を利用して、連携していく。確かに50対50の関係は難しいと思います。何をもって50対50というのかも難しいと思います。それぞれメリットがあるから連携したいと思うわけで、少しでもメリットを感じればそれは50対50なのではないか、と思います。連携の形をシステム的に作っていくことは、それはそれでよいと思います。しかし、それをやっていくのは人ですし、一生懸命やっている博物館は人が充実しているところです。やる気のある学芸員がいる館は一生懸命やっている。いくらシステムを作っても、学芸員・職員の気持ちの問題が重要だと思っています。少し言い過ぎでしょうか。そういう風に思うところがあります。ですから、連携の形は一つだけでなく、決まった形がずっと続くのではなく、どんどん変わっていってもいいのではないかと思います。システムとしてきちっとやるより、やる気のある学芸員がいる時に色々なことをやっていく、違う視点を持った学芸員が来た時には違う視点でやっていく、そういう風な連携があってもいいのかなと思いました。極端な話ですが、継続しないことが失敗なのでしょうか、また別の新しい連携が出てきてもいいのではないかなと思います。森田さんに怒られるかもしれませんが、何かそんなような感じがします。

司会：ありがとうございました。宮内さんはいかがですか。

宮内：私は博物館との相互協力を課題に挙げたのです

が、企画展を行っていく上で、モノがない、画像がない、どこへ行ったらいいのだろう、どうやって手に入れたらいいのだろう、というところに苦労しております。これは私が知らないということなので、その辺は勉強していかないといけないと思っています。それから他の博物館から資料をお借りし、必要な資料があればお貸しするというところから関係を築いていかないと企画展を続けていくというのは難しいのかなと感じました。

司会：ありがとうございました。森田さんのお話から入ってしまい申し訳ないのですが、小さい館同士と大きい館同士では対応が異なるというご意見があり、連携は長続きしなくても、失敗してもいいのではないかというご意見もありました。会場にも大きな館の方、小さな館の方がおられると思いますが、いかがでしょうか。実際の連携失敗談でも、こういった事例があるということでも構いません、ご報告いただける方はおりませんでしょうか。

今はないようですので、少し話を進めさせていただきたいと思います。駒見さんがおっしゃったように失敗しても構わないと、青柳さんが人と人との関係ができているうちに組織と組織でやっていけるようにしたい、最初は人の繋がりから入った連携を組織として永続きできるようアプローチしていた、というお話をいただきました。確かに、人と人の繋がりをどれだけ伝えられるか、というのは非常に難しい問題だと思いますし、館の大小に関わらず博物館として大事な問題だと思います。では、人の繋がりがなくなったら終わりでいいのか。どうやったら人と人の繋がりを継続させているのでしょうか。青柳さんからご意見をいただけますでしょうか。

青柳：私の場合は最初５年間位、同じ学芸員の方とずっとやっていましたが、人事異動があり、いずれ居なくなるのは覚悟しておりました。それが今年か、来年か、再来年かはわかりません。そうだとすると、人が変わることを踏まえてのプランニングをしていかなければならないし、次にどんな人が来るかは分からないので、ノウハウなどをある程度、継承できるように作っておかなければなりません。私どもの場合は幸運にもその期間が５年間位あったので、それが出来たという経緯があります。これから連携をしていく上では、人の入れ替わりを想定していかなければなりません。偶発性に頼るのではなく、永続性を求めるのであれば、人と人の繋がりに頼らない普遍的な、マニュアル対応というと語弊があるかもしれませんが、そういったものが必要になるのではないでしょうか。

駒見：話が繋がらないかもしれませんが、私は連携が失敗してもいいとは思ってはおりません。連携の形というのは変わっていってもいいのではないか、変わることが失敗ではないし、こう決めたらその通りに進めなければならないというのはしんどいことなのかなと思っています。

宮内：小さな館と小さな館はうまくいくという話がありましたが、本音の部分でお話しますと、私どものように小さな館が、大きな館で貴重な資料を展示しているのを見ると連携には腰が引けてしまいます。

司会：ありがとうございます。腰が引けないためにもこういった機会に人との繋がりが出来ればと思います。

菅根さんにお聞きしたいのですが、事前にお話しをお聞きした時に、何か連携しようと話を持ちかけられても大学では協力できることはあまりない、という話をお聞きしました。個人的な繋がりがあり、また館で収蔵しているものがあっても、求めてるものが違うとうまくいかないと思います。先ほどの菅根さんのコメントに、大学にもっと千葉のことを教えられる教員が欲しい、というがありましたが、大学と博物館が、定期的に人の交流が作れればいいのではないかなと思ったのですがいかがでしょうか？

菅根：大学側の問題になりますね。千葉県博物館協会の方々は千葉のことをよく理解していらっしゃる方が多いですが、大学には千葉学のような講義はないです。学生が地元の千葉県のことを知る機会がありません。千葉が好きな学生に対して千葉のことを教えられないのは歯痒いことです。できれば、千葉を知るとか、千葉の歴史と経済とかの講座を組んでいきたいと思っています。

博物館への要望になりますが、博物館が大学に対し

会場風景

て、こういうことが出来ます、こういう講座が出来ますとアプローチしていただきたいと思います。私は以前に県立博物館に勤務しておりましたので、博物館の方々と個人的な繋がりがあり、内容により、どなたに協力を依頼すればいいか、ある程度は解りますが、ほとんどの大学教員が地域の博物館との個人的な繋がりはないわけです。個人の繋がりを築くのは難しいので、やはり組織と組織との関係を構築しなければなりません。まずは博物館側から大学へアプローチするのが最良の方法で、長続きすると考えています。

司会：青柳さんのご意見のとおり、組織と組織との関係にしていくには、ある程度マニュアル化していかなければならない部分もあると思います。役人というのはマニュアルがないと動かないというか、大事にするという癖がありますので、過去に大学とこういうことがありましたということが、記録に残って、行動を起こしやすくなります。記録として残しておくことも大事なことだと思いました。

ここで皆様の方からも何かご意見・質問をお伺いいたしたと思いますが、いかがでしょうか。

清藤：八千代市郷土博物館の清藤と申します。森田さんの話の中で、50対50の関係についてご意見がありましたが、様々な力関係が働いて多少の揺れはあるだろうと思いますが、50対50を求めること自体がよく解りません。また、大きな館同士の連携が成立しづらいとのご意見でしたが、事例があるのかもしれませんが、連携の成否や継続性は必ずしも館の大きさの問題ではないと思います。

少し理論的なお話が多いようなので、具体的なことについてお話を移してはどうかと思います。

博物館と大学が継続的に連携していくには、結びつく軸をはっきりさせないとうまくいかないと思います。例えば青柳さんから八千代市郷土博物館との関係について評価をいただきましたが、報告にありました伝統衣装の着装体験についても10年以上続いています。お互いを理解しあい、博物館から見ても市民の方々のためになるということを認識できれば、継続していけると思います。大学と博物館の関係で一般的なのは博物館実習です。これは極めて短期的・一時的なものですが、実習期間内だけでなく、近くの大学であれば、博物館に学生が来て、何かを博物館で学んでいくことも可能だろうと思います。また、大学と博物館の共同研究についてですが、実情として博物館に共同研究にさける時間が少ない。大学から見れば役不足の相手かもしれませんが、地域のことを一番知っているのは博物館の人間であり、地域の情報を総合的に持っているのは博物館であるわけで、共同研究とまでいかないまでも地域に関することで連携していけるのかなと思います。最後に、大学と博物館が持っている様々な資料・情報を共有化し、相互に利用しあうことは可能でしょうし、大事なことだと思っています。何かしっかりした軸があれば長期的な連携は可能であると考えます。

司会：最後におっしゃった、博物館と大学の資料・情報の共有化というのは、青柳さんもおっしゃった事例のことですよね。他に何かご意見・質問ありますでしょうか。

高梨：県立中央博物館の高梨と申します。博物館が地域に出来ることを端的にいえば、研究成果を地域に還元することだと思います。地域と協働・共生を目指すという点で必要なのは、学芸員のコミュニケーション能力だと思います。今日の事例報告を興味深く聞かさせていただきました。そこで質問ですが、県立美術館で大学の先生が学生を連れてきてワークショップを行っている事例を知っているのですが、駒見さんの報告にあったようなアウトリーチを行っている大学があるのを正直知りませんでした。そういう取り組みを行おうと思ったきっかけをお教え願えないでしょうか。

司会：駒見さんお願いいたします。

駒見：大学博物館の特色を出したいと思ったのが一番のきっかけです。大学の博物館と一般の博物館の一番違うところは学生がいるということです。研究を行うことも一つの仕事ですが、学生に対する教育力を発揮するのも大学博物館の大きな役割です。それが他の博物館とは違うところです。学生に博物館を通して何かを学んでもらうにはどうしたらよいかと考えて出した答えが、アウトリーチでした。報告した内容は学生の教育として行ったことですが、これは公立の博物館も

高梨氏

出来ることではないかと思います。学生をたくさん連れて行ってのアウトリーチは公立博物館にとってもメリットになるのではないでしょうか。ただ、学生を連れていくだけなく、事前研修プログラムなどを用意して頂き、少し育ててもらいたいと思いますが、博物館のメリットになりますし、大学にとっても学生が社会実践する場となりメリットがあるのではないでしょうか。

司会：50対50の関係ということでしょうか。

駒見：相互にメリットがあるということです。

司会：ありがとうございます。他にご質問ありますでしょうか。ないようですので、私から宮内さんに質問させて頂きたいのですが。私、現代産業科学館におりました時、企業の方と向き合って館の事業や展示を一緒になって改善していく相談をする機会があったのですが、どうしても企業におんぶにだっこの部分がありました。企業にとって博物館と連携していくメリットはあるのでしょうか。あるとしたら、どのようなことがあると思われますか、お聞きしたいのですが。

宮内：資料の貸借です。資料をお借りできないと展示にも困ってしまう。

司会：お話は企業博物館としてのご意見としても受け止められるのですが、米屋さんという企業から見て、地域の博物館と連携していくのにどういったメリットがあるのかなと思いましてお聞きしてみたのですが。

宮内：博物館とともに企画展を行うなどでしょうか。例えば何か一緒に事業を行う場合、資料の管理の問題などについて、博物館との認識の隔たりが大きい気がします。

森田：少しいいでしょうか。今、現代産業科学館の話が出ましたので、発言させていただきます。現代産業科学館は開館20年になります。当初は企業側からの技術や資料の一方的な提供だったと聞いています。そのうち、経済状況という理由もあるのでしょうが、企業側から資料や技術を提供するのであるから少しは企業のことを宣伝していただけないかという要望が出てきました。その当時は公共施設内で企業の宣伝のようなことは出来ないというのが千葉県の考え方でした。その後、県でも企業広告が出せるようになり、博物館でも企業に宣伝などが出来ます、と持ちかけられることが可能になったのですが、その頃には企業の多くは広告に経費をまわす余裕があまりなくなっていた、ということがありました。制度整備が非常に遅れ、公立博物館だから出来ないことが足かせになって地域と繋がりを希薄にしてきた面がありました。バブル経済崩壊後、国も地方も地域と連携しなさいと言ってきていますが、制度整備が追いついていないので動きづらい。地域や企業と連携するためにも公立博物館は自ら制度改革に目をそむけず、積極的に国などに働きかけを行わないといけないと思っています。

司会：今のご意見をお聞きして質問ありますでしょうか。

国立歴史民俗博物館の新さんご意見お願いできますでしょうか。新さんのご所属はまさに博物館と大学が一緒になったところですので、ご意見をお聞きしたいのですが。

新：私は比較的大きな館が多いですが、大きな館も小さな館も経験して、現在国立歴史民俗博物館におります。連携という言葉はあまり好きではないので使いたくないのですが、歴博では大学と一緒にいろんなことをやっています。千葉大学とは共同研究を行っており、去年から東邦大学とも共同研究を行っております。ご存知のとおり東邦大学は理系の大学なもので、県立中央博物館や国立科学博物館で、学校教諭取得を目指す学生に様々な学習をしてきた事例がありました。理系の学生なので、将来は理科系の教員になるだろうが、学校に勤めた時に当然社会科・歴史系のことも知っておく必要があるだろうから、歴博を使って何か学習が出来ないか、という話が私のところに来て、出向いて話を聞き、学生が歴博に来て、歴博の資料を使って活動をするということを去年から行っています。歴博の場合はそういうこともやり易いのかもしれませんが、先ほどの森田さんの話のとおり、規模が大きくなると職員間の意思疎通がうまくいっているのかとか、職員が高い意欲を持ち続けられるのかという問題が出て来て、それができるかどうかに成否がかかってくると思います。小さい館でそれがなぜ出来るかというとエリアが小さいことが挙げられると思います。歴博の場合、グローバルに相手をしていかなければならないという難しさはあると思います。

博物館・美術館が地域に出来ること、というテーマはとてもいいと思うのですが、地域の人たちが何を期待しているかを当然把握していかなければならないし、それが基準になると思います。さらに発展させていくと、地域の人たちがいかに博物館・美術館を使うことができるか考えないといけないと思います。博物館・

美術館が地域に何を出来るかだけを考えていくと一方通行の話になってしまいます。相手が何を考え、何を期待しているのかを、さらにはその人たちがいかに博物館・美術館を使う能力を身に付けていくかというところまでいかないと、一緒になって何かをやるということはいつまで経っても出来ないのではないでしょうか。

司会：新さん貴重なご意見ありがとうございました。新さんのご意見に少し補足させていただきたいと思います。去年、調査研究委員会で地域の方々がどういう要望を持っているのかの把握に努めました。ただいきなり、不特定多数の地域の方を対象にするのは無理がありますので、ある程度のまとまりに絞って博物館がどのように思われているのかということを議論していただきました。個人単位ではなく、ある程度のまとまりを持った集まりを単位に捉えていくと、大学･企業･NPOという形でのテーマ設定になってしまいました。これを集約していけば、最終的には地域全体が博物館に何を期待しているのか、そして、博物館はどれだけ地域の要望に応えられているのかを議論出来ると思いました。ご指摘ありがとうございます。

こちらのアプローチの問題もありますが、言い足りない方もいらっしゃるでしょうから、今までの意見を聞いて、いかがでしょうか。

森田さん言い足りない面もあったのではないでしょうか。

森田：今日は言いづらかったのですが、私、日本の博物館学や学芸員資格制度についてはかなり問題があると思っています。法的にもしっかり改革して外国並みの専門職員を養成していかなければならないと思っていまして、青柳さん、駒見さんの報告をお聞きしていて、その部分が引っ掛かってしまいました。うまく表現出来ないのですが、個々の大学の活動がとても素晴らしいと思うのが事実で、青柳さん・駒見さんと連携することは確実にメリットがあると思いました。それを形は変わってもいいのですが、続けていく、バトンを渡していくことをやって初めて、国が求めている地域間協働の高揚、館種を越えた連携が本当に実現していくのかなと思っています。答えはないのですが、個々の成功した事例を絶やさずにやっていくと同時に、制度的にも整えていくには博物館界全体でのサポートがどうしても必要ではないかという気がします。

司会：話が変わってしまって申し訳ありませんが、私個人の感想として、駒見さんの報告をお聞きして、アウトリーチ活動そのものがミュージアムと感じました。博物館との連携というとどうしても表現が固くなります。施設やキャプションを持たなくても、資料をいくつか持っていき、伝える人がいるとそれがミュージアムという活動になるのだと、博物館の活動そのものを広めていく役割がすごくあるのだと感じました。自分でも収集がつかなくなってきたのですが、博物館という枠に囚われすぎてしまっているのかなと思いました。人を中心にして考えていけば、もっといろんなことが出来るのではないかなという風に思えてきました。

駒見：アウトリーチとして出かけて行くことは、アンケートなどを見ると確実に博物館リテラシーの一歩になっていく。それが博物館に来てくれるきっかけになると思うのです。小・中・高校生は割と博物館に来ますが、学校から無理やり連れてこられている感じが多いのだと思うのですが、出かけて行って博物館の楽しさを知らせる、どこの館でもやっていることだと思います。アウトリーチを行う目的をしっかり博物館リテラシーを養うことだと決めておけばいいのではと思います。一回だけの出前講座では出来ないですけど、少しでも興味持ってもらうことは可能だと思います。大学生にアンケートをとるとよく解るのですが、博物館はやっぱり敷居が高いのです。体験型が増えてはいますが、堅苦しいイメージがあります。学生の捉え方では博物館と科学館は違います。また、博物館と美術館も違います。特にあまりイメージが良くないというのはよろしくないかもしれませんが、歴史系の博物館です。博物館・美術館に対しては敷居が高いのです。堅苦しいところ、暗いところ、つまらなそうなところなので、外に出て行って伝えることが大事なのではないか、と思います。発達支援の学校にも博物館に来てほしいと思って、発達支援の学校にも行くのですが、子どもたちは中々博物館に来ることができない。そして親も博物館に連れて行きたがらないと先生方から聞きます。そうすれば、少しでも博物館のことを知ってもらうためにこちらから出かけていくことが価値のあることではないかな、と思っています。

司会：やはり博物館は敷居が高いのですね。そうならないように心がけているつもりですが、敷居が高いことは認めなければなりません。

他に何かご意見ありますでしょうか。以前、青柳さんとの連携を「MUSEUMちば第40・41号」に書かれ

た県立中央博物館大利根分館の佐藤さんがいらっしゃいますのでご意見をお聞きしたいのですが。

佐藤：今日は本当に色々なお立場からお話を伺えて参考になりました。自分は学校の教員から学芸員の道に入った人間ですので、発想が、大人にも子どもにも楽しく、また行きたくなる博物館するにはどうしたらいいかというところから始まっています。最初に学芸員になった時、館長から何か講座を作ってみないかと言われた時に出会ったのが青柳さんです。仕事は人なりという言葉好きなのですが、やはり熱意のある学芸員がいて、博物館は非常に盛り上がると駒見さんもおしゃっていましたが、プラス背中を押していただく上司がいないと中々実現いたしません。私は非常に館長に恵まれたなという風に思います。

そして、仲間の方々が準備に協力していただいたりしたことが、私が異動した後も年間計画に載るようになっているのは、館の皆さんの後押しがなければ実現しなかったなということはすごく思います。

楽しい、また行きたくなる、敷居がいい意味でとれてしまうような講座や展示の実現には連携、外部の機関との協力、人との出会い、そういったものがキーワードになっていくのではないか、と思います。

佐藤氏

司会：ありがとうございます。お時間の方もありますので、まとめに入らせていただきたいと思います。

本日は３人の報告者の方、２人のコメンテーターの方にご意見をいただきながら、お集まりいただいた皆さんと博物館・美術館が地域に出来ることについて議論してきたのですが、やはり大事なのは人の繋がりだと感じました。

人の繋がりを作るためにも情報発信が大切あること、それから職員自信のコミュニケーションの大切さ改めて感じました。やはりユーザー目線といいますか、一般の利用者の方・企業・大学がどうゆう目線を持っているのか、どういうことを感じておられるのか。そういったことを感じ取るアンテナが高くないと、いくらコミュニケーション能力があってもそれが出来ない訳ですから、我々博物館職員というのはもっともっとアンテナを高く持って色々なことにアプローチしていかなければならないのだなと改めて感じました。まずは動くことが大事で、動いているうちに人との繋がりが出来、それが組織と組織の関係に結びつくにつながるのではないか。それが50対50の関係ではなくても、そこから段々いい関係が築き、継続していくことが大切なことだと思います。また、その努力を続けていかなければならないということでしょうか。

本日の研究報告会は、これにてまとめさせていただきたいと思います。最後に松戸市立博物館長　調査研究委員会の望月理事より閉会の挨拶をお願いいたします。

望月：本日は博物館・美術館が地域にできること－協働・共生を目指して－という大変重いテーマについて、半日という短い時間の中で貴重な報告をいただいた東京成徳大学の青柳先生、和洋女子大学の駒見先生、成田羊羹資料館の宮内さん、またコメンテーターの千葉経済大学菅根先生、千葉県立現代産業科学館の森田課長たいへんありがとうございました。また司会の大役を受けられた千葉県立関宿城博物館の尾﨑さん、ご苦労様でした。さらに本日の会場を提供いただきました八千代市立郷土博物館清藤館長以下スタッフの方々、ありがとうございました。本日の報告会について、たいへん感じ取ることがあったことと思います。

私は松戸市立博物館に勤めておりますが、松戸市には大学では聖徳大学・千葉大学園芸学部、企業で言いますとマツモトキヨシの本社がございます。こういった地域的特色がありますが、それらを生かした活動が出来ているかというと、全く出来ておりません。これからの課題ということになります。皆さん博物館・美術館の今後の活動に役立てていただければ幸いと思います。本日は長時間にわたりまして、ありがとうございました。

千葉県博物館協会会員加盟館園一覧（平成26年２月末現在）

No.	館　園　名	〒	住　所	TEL	FAX
1	我孫子市鳥の博物館	270-1145	我孫子市高野山234-3	04-7185-2212	04-7185-0639
2	いすみ市郷土資料館	298-0124	いすみ市弥正93-1	0470-86-3708	0470-86-3708
3	市川市芳澤ガーデンギャラリー	272-0826	市川市真間5-1-18	047-374-7687	047-374-2588
4	市原湖畔美術館(市原市水と彫刻の丘)	290-0554	市原市不入75-1	0436-98-1525	0436-98-1521
5	稲毛民間航空記念館	261-0003	千葉市美浜区高浜7-2-2	043-277-9000	043-277-9000
6	犬吠埼マリンパーク	288-0012	銚子市犬吠埼9575-1	0479-24-0451	0479-24-0449
7	伊能忠敬記念館	287-0003	香取市佐原イ1722-1	0478-54-1118	0478-54-3649
8	印西市立印旛歴史民俗資料館	270-1616	印西市岩戸1742	0476-99-0002	0476-99-2223
9	浦安市郷土博物館	279-0004	浦安市猫実1-2-7	047-305-4300	047-305-7744
10	大原幽学記念館	289-0502	旭市長部345-2	0479-68-4933	0479-68-4933
11	御宿町歴史民俗資料館	299-5102	夷隅郡御宿町久保2200	0470-68-4311	0470-68-4311
12	海岸美術館	295-0014	南房総市千倉町川戸550	0470-44-2611	0470-44-4439
13	風の資料館「航風館」	299-4403	長生郡睦沢町上市場667-3	0475-44-2101	0475-44-2101
14	かつうら民俗資料館	299-5272	勝浦市貝掛391	0470-76-3038	0470-76-4129
15	香取神宮宝物館	287-0017	香取市香取1697	0478-57-3211	0478-57-3214
16	金谷美術館	299-1861	富津市金谷2146-1	0439-69-8111	0439-69-8444
17	鹿野山神野寺宝物拝観所	292-1155	君津市鹿野山324-1	0439-37-2351	0439-37-2352
18	鎌ヶ谷市郷土資料館	273-0124	鎌ヶ谷市中央1-8-31	047-445-1030	047-443-4502
19	鴨川シーワールド	296-0041	鴨川市東町1464-18	04-7093-4803	04-7093-3084
20	鴨川市郷土資料館	296-0001	鴨川市横渚1401-6	04-7093-3800	04-7093-1101
21	木更津市郷土博物館金のすず	292-0044	木更津市太田2-16-2	0438-23-0011	0438-23-2230
22	君津市立久留里城址資料館	292-0422	君津市久留里字内山	0439-27-3478	0439-27-3452
23	航空科学博物館	289-1608	山武郡芝山町岩山111-3	0479-78-0557	0479-78-0560
24	国際上総埴生美術館	299-4403	長生郡睦沢町上市場2416-5	0475-44-2006	0475-44-2006
25	国立歴史民俗博物館	285-8507	佐倉市城内町117	043-486-0123	043-486-4209
26	佐倉市立美術館	285-0023	佐倉市新町210	043-485-7851	043-485-9892
27	佐藤佐太郎記念福富雷童記念江畑美術館	289-2612	旭市蛇園字出清水2516	0479-55-2918	0479-55-2110
28	山武市歴史民俗資料館	289-1324	山武市殿台343-2	0475-82-2842	0475-82-2842
29	芝山町立芝山古墳・はにわ博物館	289-1619	山武郡芝山町芝山438-1	0479-77-1828	0479-77-2969
30	城西国際大学水田美術館	283-8555	東金市求名1	0475-53-2562	0475-55-3265
31	白浜海洋美術館	295-0102	南房総市白浜町白浜628-1	0470-38-4551	0470-38-4551
32	市立市川考古博物館	272-0837	市川市堀之内2-26-1	047-373-2202	047-373-2205
33	市立市川自然博物館	272-0801	市川市大町284	047-339-0477	047-339-1210
34	市立市川歴史博物館	272-0837	市川市堀之内2-27-1	047-373-6351	047-373-6352
35	白井市郷土資料館	270-1422	白井市復1148-8	047-492-1124	047-492-8030
36	宗吾霊宝殿・宗吾御一代記館	286-0004	成田市宗吾1-558	0476-27-3131	0476-27-3135
37	袖ヶ浦市郷土博物館	299-0255	袖ヶ浦市下新田1133	0438-63-0811	0438-63-3693
38	館山市立博物館	294-0036	館山市館山351-2	0470-23-5212	0470-23-5213
39	千葉経済大学地域経済博物館	263-0021	千葉市稲毛区轟町3-59-5	043-253-9111	043-254-6600
40	千葉県酪農のさと	299-2507	南房総市大井686	0470-46-8181	0470-46-8182
41	千葉県立現代産業科学館	272-0015	市川市鬼高1-1-3	047-379-2000	047-379-2221

No.	館　園　名	〒	住　所	TEL	FAX
42	千葉県立関宿城博物館	270-0201	野田市関宿三軒家143-4	04-7196-1400	04-7196-3737
43	千葉県立中央博物館	260-8682	千葉市中央区青葉町955-2	043-265-3111	043-266-2481
44	千葉県立美術館	260-0024	千葉市中央区中央港1-10-1	043-242-8311	043-241-7880
45	千葉県立房総のむら	270-1506	印旛郡栄町竜角寺1028	0476-95-3333	0476-95-3330
46	千葉市科学館	260-0013	千葉市中央区中央4-5-1	043-308-0511	043-308-0520
47	千葉市美術館	260-8733	千葉市中央区中央3-10-8	043-221-2311	043-221-2316
48	千葉市立加曽利貝塚博物館	264-0028	千葉市若葉区桜木8-33-1	043-231-0129	043-231-4986
49	千葉市立郷土博物館	260-0856	千葉市中央区亥鼻1-6-1	043-222-8231	043-225-7106
50	長南町郷土資料館	297-0121	長生郡長南町長南2127-1	0475-46-1194	0475-46-1194
51	ＤＩＣ川村記念美術館	285-8505	佐倉市坂戸631	043-498-2131	043-498-2139
52	流山市立博物館	270-0176	流山市加1-1225-6	04-7159-3434	04-7159-9998
53	成田山書道美術館	286-0023	成田市成田640	0476-24-0774	0476-23-2218
54	成田山霊光館	286-0021	成田市土屋238	0476-22-0234	0476-22-0242
55	成田市三里塚御料牧場記念館	286-0116	成田市三里塚御料1-34	0476-35-0442	0476-35-0442
56	成田市下総歴史民俗資料館	289-0108	成田市高岡1500	0476-96-0080	0476-96-0080
57	成田羊羹資料館	286-0032	成田市上町500	0476-22-2266	0476-22-1661
58	野田市郷土博物館	278-0037	野田市野田370	04-7124-6851	04-7124-6866
59	野田市立中央小学校教育史料館	278-0037	野田市野田611	04-7122-2116	04-7122-2117
60	菱川師宣記念館	299-1908	安房郡鋸南町吉浜516	0470-55-4061	0470-55-1585
61	廣池千九郎記念館	227-8654	柏市光ヶ丘2-1-1	04-7173-3023	04-7173-3988
62	藤崎牧士史料館	286-0203	印旛郡富里市久能583	0476-92-1258	
63	ふなばしアンデルセン公園子ども美術館	274-0054	船橋市金堀町525	047-457-6661	047-457-7584
64	船橋市郷土資料館	274-0077	船橋市薬円台4-25-19	047-465-9680	047-467-1399
65	船橋市飛ノ台史跡公園博物館	273-0021	船橋市海神4-27-2	047-495-1325	047-435-7450
66	平成美術館	274-0824	船橋市前原東1-1-1	047-473-1210	047-476-2720
67	房總浮世繪美術館	297-0222	長生郡長柄町大庭172	0475-35-2001	0475-35-2001
68	麻雀博物館	299-4502	いすみ市岬町中原1-2	0470-87-8886	0470-87-8806
69	松戸市立博物館	270-2252	松戸市千駄堀671	047-384-8181	047-384-8194
70	松山庭園美術館	289-2152	匝瑳市松山630	0479-79-0091	0479-73-6716
71	睦沢町立歴史民俗資料館	299-4413	長生郡睦沢町上之郷1654-1	0475-44-0290	0475-44-0213
72	METAL ART MUSEUM HIKARINOTANI	270-1603	印西市吉高2465	0476-98-3151	0476-98-3156
73	茂原市立美術館・郷土資料館	297-0029	茂原市高師1345-1	0475-26-2131	0475-26-2132
74	八街市郷土資料館	289-1115	八街市八街ほ800-3	043-443-1726	043-443-1726
75	八千代市立郷土博物館	276-0028	八千代市村上1170-2	047-484-9011	047-482-9041
76	夢紫美術館	289-0313	香取市小見川581	0478-83-1089	0478-83-1092
77	吉澤野球博物館	273-0035	船橋市本中山1-6-10	047-334-3675	047-334-8808
78	歴史の里　芝山ミューゼアム	289-1619	山武郡芝山町芝山298	0479-77-0004	0479-77-1393
79	和洋女子大学文化資料館	272-0827	市川市国府台2-3-1	047-371-2494	047-371-2494
80	近藤　正	283-0812	東金市福俵470	0457-54-0543	
	千葉県博物館協会事務局	260-8682	千葉市中央区青葉町955-2	043-265-3111	043-266-2481

MUSEUMちば　第43号
2014年４月24日

発　行　千葉県博物館協会
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2
千葉県立中央博物館内
TEL ０４３（２６５）３１１１
http://www.chiba-web.com/chibahaku/index.html
編　集　千葉県博物館協会調査研究委員会
印　刷　三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397